

## 性別違和感のある児童生徒への学校における支援

畔 田 由梨恵

安来市立山佐小学校

中 下 富 子

埼玉大学教育学部学校保健学講座

キーワード：性自認、性的指向、セクシュアルマイノリティ、学校、支援

### 1. はじめに

#### 1-1 国内外の動向

近年、性同一性障害や同性愛、両性愛、性分化疾患などのセクシュアルマイノリティの存在の可視化が高まっている<sup>1-3)</sup>。

1800年代、欧米の一部の地域では、同性愛が犯罪視されるとともに、異常な精神状態とされ治療の対象となっていたが<sup>4)</sup>、1969年には、アメリカで起こったストーンウォール事件をきっかけに同性愛解放運動が活発化し、1992年には、世界保健機構の疾病及び関連健康問題の国際統計分類から同性愛が除かれた<sup>1)</sup>。2006年には、セクシュアルマイノリティに関する国際人権法の諸原則をまとめた「性的指向並びに性自認に関連した国際人権法の適用上のジョグジャカルタ原則」が、2011年6月には、国連人権理事会において、「人権と性的指向・性別自認 (Human rights, sexual orientation and gender identity)」と題するセクシュアルマイノリティの人権に関する国連決議が採択され、同年12月には、ユネスコで「同性愛嫌悪によるいじめと万人のための教育に関するリオ宣言」が採択され、あらゆる国の学校、教育機関、若者、地域、政策立案者や政府が、同性愛の嫌悪によるいじめの負の連鎖を防止し、すべての人が教育への普遍的権利を享受できるよう、環境整備の必要性とその責任が明示された<sup>2)</sup>。

国内では、1920年代、同性愛は、欧米を背景に病気として扱われ<sup>4)</sup>、性同一性障害においては、1964年のブルーボーイ事件により、日本での性別適合手術は違法という認識が一般的になった<sup>1)</sup>。1979年に文部省（当時）から出された「生徒の問題行動に関する基礎資料」では、同性愛が「倒錯型性非行」として扱われた<sup>5)</sup>。1997年には「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン（第1版）」が作成され、1998年に日本初の公式な性別適合手術が行われた<sup>1)</sup>。2000年には、「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」が制定され、「人権教育・啓発に関する基本計画」に同性愛者への差別等の解決に資する施策の検討を行うことが明記された<sup>2)</sup>。2003年には、「性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律」が制定され、性同一性障害者が法的保護の対象として認知されるに至った<sup>1)</sup>。同年には、宮城県内で、男女共同参画社会の定義に「性別又は性的指向」を盛り込んだ日本初の条例が制定され、セクシュアルマイノリティの人権擁護が謳われた<sup>6)</sup>。2005年に公表された『「人権教育のための国連10年」に関する国内行動計画の推進状況』では、セクシュアリティに関する人権について、積極的に啓発し人権擁護活動を推進していくことが明記された<sup>2)</sup>。しかし、2008年に、国連欧州本部で行われた国連人権理事会での人権状況の審査で、日本政府は、「性的指向と性自認に基づく差別を撤廃するための措置を講じるよう」勧告され、日本政府はこの勧告を受諾した<sup>2)</sup>。2010年に、文部科学省は、性同一性障害への対応について、学校において適切に対応できるよう、必要な情報提供を行うことを含め指導・助言することを通知した<sup>7)</sup>。そのな

かでは、各学校において性同一性障害の児童生徒の心情に十分配慮した対応の必要性が述べられている。2012年には、特に思春期に訪れる二次性徴を抑えるホルモン治療を可能にする「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン（第4版）」が出された<sup>8)</sup>。

## 1-2 セクシュアルマイノリティに関する先行研究

セクシュアルマイノリティの当事者の抱える問題として、性同一性障害において、中塚ら<sup>9)</sup>は、当事者のほとんどが思春期以前に性別違和感を自覚しており、最も悩んだこととして、二次性徴や恋愛に関することがあげられ、思春期に多い問題行動では、不登校29.2%、自殺年慮74.8%、自殺未遂・自傷行為31.0%、さらに、強迫神経症やうつ状態17.9%が見られ、特にMTFで高率であったことを報告している。男性同性愛者・両性愛者において、日高<sup>10)</sup>は、男性同性愛者・両性愛者が異性愛者を装うことによる葛藤を強く感じている者ほど、抑うつや特性不安、孤独感が高く、強い不安傾向68%、抑うつ傾向50.3%が見られ、精神的健康が悪化していることを報告している。また、学校生活でのいじめ被害として、自殺年慮65.9%、教室での居心地の悪さを感じる57.0%、言葉による暴力被害54.4%、言葉以外のいじめ被害45.1%、自殺未遂14.0%であったこと、同性愛、両性愛であることを自覚した平均年齢が13.1歳、初めて自殺年慮をきたした平均年齢が16.4歳、初めて自殺未遂を行った平均年齢が17.7歳の学齢期であったことが報告されている<sup>11)</sup>。女性同性愛者・両性愛者において、石井<sup>12)</sup>は、自己表現の難しさやカミングアウトの有無を含め、他者との関係を築く難しさ、漠然とした不安や将来への展望を持てないといった生きづらさを抱えていることを述べ、伊藤ら<sup>13)</sup>は、親に対して同性愛者理解・カミングアウトへの精神的負担の緩和のためのソーシャルサポートが求められていることをあげている。

セクシュアルマイノリティに対する他者の認識として、高校生において、田原<sup>14)</sup>は、女子生徒の方がセクシュアルマイノリティに対して容認する傾向があることを報告している。大学生・大学院生において、桐原ら<sup>15)</sup>は、男子学生の方が、男らしさ女らしさに捉われており、同性愛者に対するイメージとカミングアウトに対する反応は否定的であることを述べ、和田<sup>16)</sup>は、女性よりも男性の方が同性愛に嫌悪・拒否的であり、以前に比べ近年の方が、同性愛に対して嫌悪・拒否ではないが、容認・受容的でもないことを報告している。

セクシュアルマイノリティに対する学校での情報提供及び対応について、田中<sup>17)</sup>は、高等学校定時制課程において、性同一性障害が疑われる異性装をした生徒一事例の学校での支援過程を報告している。菊池ら<sup>18)</sup>は、性別違和感のある児童生徒に対する学校の対応について、小学校・中学校の教諭の約4人に1人が学校の中で性別違和感のある児童生徒に接しており、9人に1人が自分自身で担任をしていることを報告している。また、性別違和感のある児童生徒に学校が対応する場合、誰が主体となって対応するべきかという調査においては、担任・養護教諭が上位を占めている。さらに、教諭自身が性別違和感のある児童生徒を受容し、周囲の児童生徒が多様な性のあり方を理解するように配慮することで、いじめなどの発生を防ぐ等の環境を整えることの重要性を指摘している。中塚ら<sup>9)</sup>は、性別違和感のある児童生徒の思春期の問題を解決するためには、そのような児童生徒が早期に相談しやすい校内体制を整え、医療機関との連携による支援の重要性を述べている。養護教諭を対象とした筆者ら<sup>19)</sup>の調査では、性別違和感のある生徒へ支援するためには、性別違和感を含めてそのような生徒を受容し、カミングアウトへの考えを十分に考慮して、必要に応じて学校内外の関係者と連携した支援体制を構築する重要性を述べた。岡崎ら<sup>20)</sup>は、教育関係者を対象にした調査によって、性同一性障害の子どもへの学校の対応について関心があ

るとの回答が6割を占め、特に養護教諭の関心が高い一方で、このような事例は稀との回答が半数と多く、現実感をもてていない場合が考えられ、性別違和感のある子どもの存在に現実感をもてる取り組みが必要であることと、文部科学省の通知の認知度が低い現状を報告している。また、日高ら<sup>11)</sup>は、学校教育現場における同性愛の扱いについて、一切学習していない、異常なものであるといった不適切な情報提供や対応が全体の9割を占めていることを報告しており、杉山<sup>21)</sup>は、セクシュアルマイノリティに関する教育の必要性を述べている。

これらのことから、性別違和感のある児童生徒は、二次性徴や恋愛などへの悩み、不登校や自殺行動等の様々な問題を抱えていることが確認された。また、学校においては、性別違和感のある児童生徒の状況についての研究は多くみられるが、そのような児童生徒への学校における支援についての研究は見当たらない。また、筆者ら<sup>19)</sup>は、性別違和感のある中学生・高校生への養護教諭の支援方法について調査し、研究の課題として、性別違和感のある生徒の辛さや願望への対応には教育活動全体における支援を明らかにすること、及び性別違和感を自覚し始める時期を考慮すると、小学校、中学校、高等学校の教職員へ調査する必要性をあげた。

### 1-3 研究目的

本研究では、小学校、中学校、高等学校に勤務する教諭、養護教諭への質問紙調査（研究A）及び面接調査（研究B）により、性別違和感のある児童生徒への学校における支援について明らかにすることを目的とした。

性別違和感のある児童生徒への学校における支援を明らかにすることは、今後の性別違和感のある児童生徒への学校における適切な支援を行うための基礎資料となり、そのような児童生徒がQOLの向上を目指した学校生活を送ることにつながると考えられる。

### 1-4 用語の操作的定義

「性別違和感」とは「性自認や性的指向などの自分の性に対して、不満足感や不安感、不安定感をもっている心理状態」とする<sup>2)22)</sup>。

「セクシュアルマイノリティ」とは、「性の在り方について全体から見ても少数の立場にある人やその状態、及びその状態を総合的に表すもの」とする<sup>1)</sup>。

## 2. 研究A

### 2-1 目的

小学校、中学校、高等学校に勤務する教諭、養護教諭への質問紙調査から、性別違和感のある児童生徒への学校における支援の実態を明らかにすることを目的とした。

### 2-2 方法

#### (1) 対象及び調査方法

X市内の公立小学校、中学校、高等学校計164校の現職の教諭、養護教諭計328名を対象とし、2012年12月（1か月間）に、無記名自記式質問紙調査を実施した。

#### (2) 調査内容

調査内容は、教諭、養護教諭が行った性別違和感のある児童生徒への支援の実態が明らかにな



るよう、先行研究の調査<sup>9)11)18)</sup>を参考に、①対象者の属性（性別、校種、職種、年齢、教員経験年数）、②性別違和感のある児童生徒との出会い経験の有無、③性別違和感のある児童生徒への支援経験の有無（支援人数を含む）、④支援した児童生徒の状況（校種及び学年、名簿上の性別、悩みの有無、問題行動の有無、連携者・連携機関）、⑤性別違和感のある児童生徒への支援に対する考え等について（自由記載回答）とした。

### (3) 分析方法

分析は、解析ソフトSPSSVer.21を用いて、単純集計を行った。また、自由記載回答は、Berelson, B.による内容分析法<sup>23)</sup>を用いて分析した。

### (4) 倫理的配慮

本研究は、「文部科学省・厚生労働省の疫学研究に関する倫理指針（平成20年）」<sup>24)</sup>に基づき、学校、教諭、養護教諭、児童生徒など個人のプライバシーを遵守した。事前にX市内の公立小学校、中学校、高等学校の学校長に依頼文を郵送し、調査への理解、協力を得て、教諭、養護教諭の回答をもって研究参加の同意を得たものとした。

## 2-3 結果及び考察

### (1) 対象者の属性

対象は、X市内の公立小学校、中学校、高等学校に勤務する現職の教諭、養護教諭計328名のうち、回答者数は101名であり、有効回答率は30.8%であった（表1）。

対象者は女性86名、男性14名であり、小学校67名、中学校29名、高等学校3名であった。また、養護教諭68名、教諭31名であった。年齢は、50～54歳の回答が18名と最も多く、教員経験年数は、30～34年の回答が16名と最も多かった。

### (2) 性別違和感のある児童生徒への支援の実態

教諭及び養護教諭が性別違和感のある児童生徒と今までに出会った経験は30.7%であり、支援した経験は17.8%であった。教諭では、約4.5人に1人に出会った経験があり、菊池ら<sup>18)</sup>とほぼ同様の結果が得られた。養護教諭では、約3人に1人に出会った経験があった。男性同性愛者・両性愛者において、いじめ被害を受けた場合の学校内の避難場所として、保健室を利用している<sup>11)</sup>ことから、保健室経営を担う養護教諭は、性別違和感のある児童生徒と接する機会が多いことが考えられる。また、性同一性障害に関する報道について、教諭の約6割が関心をもっており、特に養護教諭の関心が約9割と教諭に比べて高いことが報告されている<sup>20)</sup>。さらに、男性教諭より、女性教諭のほうが性別違和感のある児童生徒への悩みや問題に気が付きやすいことが報告されており<sup>18)</sup>、養護教諭には女性が多い<sup>25)</sup>ことから、出会った経験において、教諭と比べて養護教諭の方が高かったと推察される。

表1 対象者の属性

		N	%
性別	男性	14	13.9
	女性	86	85.1
	不明	1	1
	合計	101	100
校種	小学校	67	66.3
	中学校	29	28.7
	高等学校	3	3
	不明	2	2
	合計	101	100
職種	教諭	31	30.7
	養護教諭	68	67.3
	不明	2	2
	合計	101	100
年齢	20～24歳	8	7.9
	25～29歳	8	7.9
	30～34歳	8	7.9
	35～39歳	12	11.9
	40～44歳	17	16.8
	45～49歳	15	14.9
	50～54歳	18	17.8
	55～59歳	13	12.9
	60歳以上	1	1
	不明	1	1
	合計	101	100
教員経験年数	0～4年	14	13.9
	5～9年	8	7.9
	10～14年	8	7.9
	15～19年	11	10.9
	20～24年	14	13.9
	25～29年	13	12.9
	30～34年	16	15.8
	35～39年	8	7.9
	40年以上	1	1
	不明	8	7.9
	合計	101	100

しかし、多くの教諭、養護教諭が性別違和感のある児童生徒との出会った経験がないと回答している。自由記載回答においても、当該児童生徒に出会ったことがなく、支援について考える機会がないとの記述が最も多く見られた。しかし、同性愛者については、全人口の3～10%であることから、40人のクラスの中に何人かは存在している<sup>1-2)26)</sup>。また、岡崎ら<sup>20)</sup>は、教諭が養護教諭に比べて、性別違和感のある児童生徒の存在について関心はあるものの、現実味をもって対応できていないと述べている。また、性別違和感のある児童生徒が、周囲にカミングアウトできない現状がある<sup>27-28)</sup>。これらのことから、教諭及び養護教諭が、性別違和感のある児童生徒の存在を認識していなかったり、児童生徒自身の性別違和感への自覚やカミングアウトがなかったりすることで、性別違和感のある児童生徒との出会った経験がないことが考えられる。

性別違和感のある児童生徒へ「支援した経験がある」との回答は18名(17.8%)、「支援した経験がない」との回答は83名(82.2%)であり、支援した経験がある教諭及び養護教諭計18名のうち、1名あたりの支援事例数は、1事例が13名(72.2%)、2事例が4名(22.2%)、3事例が1名(5.6%)であった。性別違和感のある児童生徒への支援した経験がある教諭及び養護教諭計18名から得られた支援事例数は24件であり、性別違和感のある児童生徒への支援事例の対象児童生徒の校種及び学年は、中学校3年生6件(25.0%)、中学校2年生5件(20.8%)、中学校1年生4件(16.7%)、小学校5年生3件(12.5%)、小学校4年生2件(8.3%)、小学校6年生2件(8.3%)、小学校1年生1件(4.2%)、高校2年生1件(4.2%)であり、小学校高学年から中学校が多かった。これは、二次性徴が顕著になり、制服の着用が求められ、恋愛への関心の高まりや、着替えや保健体育を男女別に行うといった性別を意識する時期である<sup>2)8)</sup>。性同一性障害者において、思春期に抱えやすい悩みや問題行動が報告され<sup>9)</sup>、男性同性愛、両性愛者において、同性愛者と自覚した時期が13.1歳、同性愛・ホモセクシュアルという言葉を知った13.8歳、異性愛者ではないかも知れないと考えた15.4歳と中学校時代であった<sup>11)</sup>。

また、対象児童生徒の名簿上の性別は、男子15件(62.5%)、女子9件(37.5%)であり、女子より男子の方が多かった。性同一性障害では、一般人口がMTF (male to female) の比率が高いとされていることや<sup>9)</sup>、GIDの説明や、ホルモン治療への希望がFTM (female to male) に比べて早く<sup>29)</sup>、宮澤ら<sup>30)</sup>によると、女性同性愛者より男性同性愛者のメディア露出が多く、印象付きやすいことが述べられており、女子よりも男子の支援が多く、男子の方が認識しやすいと考えられる。

さらに、支援した児童生徒の75%が悩みを抱えていた。その内容は、友人関係10件(55.6%)、制服の着用・服装7件(33.3%)、恋愛6件(33.3%)、家族関係3件(16.7%)、トイレの使用2件(11.1%)、進路2件(11.1%)、体育・水泳の授業1件(5.6%)、健康診断への参加1件(5.6%)、その他4件(22.2%)があげられた。また、66.7%に問題行動があった。その内容は、不登校7件(43.8%)、いじめ3件(18.8%)、うつ状態2件(12.5%)、自傷行為1件(6.3%)、自殺年慮・自殺行為1件(6.3%)があげられた。性別違和感のある児童生徒の多くが、悩みや学校生活においての問題を抱えていることが認められ、当事者を対象とした調査<sup>9)11)28)</sup>でも同様の結果が示されている。

対象支援事例において、66.7%が連携者・連携機関による支援であることが認められた。その連携者・連携機関は、担任12件(75.0%)が最多で、次いで保護者9件(56.3%)、校内委員会8件(50.0%)、管理職7件(43.8%)、スクールカウンセラー6件(37.5%)、他教員6件(37.5%)、養護教諭3件(18.8%)といった校内関係者による連携が多くみられた。性別違和感がある児童

生徒へ対応する場合、誰が主体となって対応すべきか、という調査<sup>18)</sup>において、担任、養護教諭、保護者、専門医、スクールカウンセラーの順に高率であげられており、本研究においても、それらの関係者との連携が認められた。本研究では、誰が主体となって支援をしていたのかは不明であるが、性別違和感のある児童生徒への学校における支援について、担任、保護者、養護教諭、スクールカウンセラーが支援のキーパーソンになると考えられる。また、支援する上で必要となる条件についての調査では、保護者や学校全体、校長の了承があることがあげられ<sup>18)</sup>、本調査においても、保護者、校内委員会、管理職が連携者として確認され、保護者、校内関係者との共通理解による支援が必要であると考えられる。

### (3) 性別違和感のある児童生徒への学校における支援に対する認識

回収された質問紙101件のうち、自由記載回答の得られたものは、65件であった。65件の自由記載回答を151件の記録単位に分割した。151件記録単位のうち、教諭及び養護教諭の性別違和感のある児童生徒への支援に対する考えが示された117件の記録単位を分析の対象とした。

教諭及び養護教諭の性別違和感のある児童生徒への支援に対する考えは、記述単位117件より、69項目のサブカテゴリ、12項目のカテゴリが見出された(表2)。以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリを〔 〕で示した。この12項目のカテゴリは、【支援方法を学ぶ必要性】が最も多く確認され、次いで、【支援上の課題や困難点】、【連携による支援の必要性】、【相談できる環境づくりの必要性】、【対応するための環境づくりの必要性】、【個性を認める環境づくりの必要性】、【性別違和感によって生じる問題】、【本人を支持する必要性】、【多様性を受容する資質の必要性】、【支援方法を検討する必要性】、【性別違和感に関する教育の必要性】、【当該児童生徒の把握】が順にあげられた。

性別違和感のある児童生徒への学校における支援について、教諭及び養護教諭が【支援方法を学ぶ必要性】を考えていることが最も多かった。岡崎ら<sup>20)</sup>の調査では、性別違和感のある児童生徒への支援について重要であることとして、教職員全体が基礎知識をもつことが高率であげられ、教諭、養護教諭は、性別違和感について知識を得て支援について学ぶ必要性を認識していると考えられる。しかしながら、〔支援について考える機会がない〕が全体で最も多いサブカテゴリとして認められた。〔研修会が必要である〕というように、性別違和感について学ぶ機会を意図的に作る必要があると考えられる。次に多いカテゴリとして、教諭及び養護教諭は【支援上の課題や困難】を認識していた。その内容は、〔性教育を行う時の配慮が必要である〕、〔進路決定に課題がある〕、〔日本の教育内容に支援の限界がある〕、〔個々の状況に合わせた支援について課題がある〕、〔性別違和感によって悩みの気付きに差がある〕といった具体的な内容があげられ、性別違和感のある児童生徒への支援について様々な課題があるように<sup>9)18)20-21)</sup>、教育現場でも、支援を行う上での環境整備が追い付いていない現状にあることが確認された。

一方で、教諭及び養護教諭は、それらの現状を認識するとともに、【連携による支援の必要性】、【相談できる環境づくりの必要性】、【対応するための環境づくりの必要性】、【個性を認める環境づくりの必要性】、【本人を支持する必要性】、【多様性を受容する資質の必要性】、【支援方法を検討する必要性】、【性別違和感に関する教育の必要性】をあげ、支援に必要な事項を認識していた。教諭及び養護教諭を対象にした調査では、支援する上で、保護者の了承や、専門医の協力、チーム作り、校長のリーダーシップが必要であると回答しているように<sup>18)20)</sup>、本研究においても、〔組織で支援していくことが重要である〕、〔専門機関との連携が必要である〕、〔保護者との連携が必要である〕、〔他教員との連携が必要である〕、〔校内外関係者との連携が重要である〕ことを認識していた。

また、相談できる環境づくりや学校生活で対応するための環境づくりの必要性を認識していた。



表2 教諭及び養護教諭の性別違和感のある児童生徒への支援についての思考カテゴリー一覧

カテゴリ	サブカテゴリ
支援方法を学ぶ必要性	支援について考える機会がない
	支援方法について知りたい
	研修会が必要である
	性別違和感のある児童生徒が在籍する頻度を知りたい
支援上の課題や困難点	支援することが困難である
	気持ちを把握する困難さがある
	支援について不安がある
	性教育を行う時の配慮が困難である
	性別違和感のある児童生徒を発見することが困難である
	本人や保護者の気持ちを把握できない状況がある
	進路決定に課題がある
	支援への理解がないことが課題である
	本人や保護者が性別違和感に気が付いていない状況がある
	個々の状況に合わせた支援について課題がある
	日本の教育内容に支援の限界がある
	理解者を獲得することや学校の環境整備について課題がある
	学校間での連携が取れていない状況がある
	小学校では性別違和感を自覚しにくい
	中学校では性別違和感を自覚しやすい
連携による支援の必要性	性別違和感によって悩みの気付きに差がある
	支援方法について考えている
	支援方法について悩む
	組織で支援していくことが重要である
	保護者との連携が必要である
	専門機関との連携が必要である
	他教員との連携が必要である
	校内外関係者との連携が重要である
	ケース会議で共通理解を図る必要がある
相談できる環境づくりの必要性	理解者を増やす必要がある
	専門職として支援する必要がある
	関係機関との連携が重要である
	校内外関係者をコーディネートすることが必要である
	受容することが重要である
対応するための環境づくりの必要性	話を聞くことが重要である
	相談しやすい環境を整える必要がある
	悩みを理解する必要がある
	カウンセリングをする必要がある
	気持ちを受容して対応することが必要である
	個々の状況に沿った対応が重要である
	着替えに配慮する必要がある
個性を認める環境づくりの必要性	いじめられないように見守る必要がある
	性教育を行う時に配慮する必要がある
	男女別の活動時の環境整備が必要である
	精神的負担が軽くなるよう配慮する必要がある
	慎重に支援を進める必要がある
性別違和感によって生じる問題	個性を認め合う学級経営が重要である
	個性を認め合う関係作りが重要である
	性別違和感に対する理解が必要である
	他生徒への指導が必要である
本人を支持する必要性	いじめを許さない学級経営が必要である
	制服着用による不登校の問題がある
	いじめの対象になる可能性がある
	偏見を持たれる可能性がある
多様性を受容する資質の必要性	孤独感をもつ可能性がある
	カミングアウトできない辛さがある
	発達段階によって悩みが深くなる
支援方法を検討する必要性	気持ちを支持する必要がある
	自己肯定感を高める指導が重要である
	自分の性を認められるよう指導する必要がある
性別違和感に関する教育の必要性	将来の生き方について支持する必要がある
	人権を尊重した対応が必要である
	性の多様性を認める人間性が必要である
当該児童生徒の把握	本人とともに対応策を検討する必要がある
	QOLの向上のために支援方法を検討する必要がある
	性別違和感について他生徒へ教育する必要がある
	心身の発達について理解する必要がある
	性別違和感に関する教育が必要である
	本人の心身の状態を把握する必要がある
	性別違和感のある児童生徒を早期発見する必要がある

性別違和感のある児童生徒の抱える課題の一つに「カミングアウト」がある。中塚<sup>27)</sup>によると、性同一性障害者において、約75%が、小学校の頃、カミングアウトしまいと思っており、日高ら<sup>11)</sup>によると、男性同性愛・両性愛者において、自殺未遂に関連する倍率が、友人にカミングアウトした場合、していない人と比べて1.5倍となり、6人以上にカミングアウトしていると3.6倍になることが報告されており、杉山<sup>21)</sup>も、自分の性別違和感を素直に言えないことによって、人間関係づくりに影響することやストレス状態になることを指摘している。女性同性愛者では、石井<sup>12)</sup>が、カミングアウトの有無で差別を回避するなど慎重に行っていることを報告している。また、セクシュアルマジョリティの反応として、女性よりも男性の方が、同性愛に対して否定的であることが報告されている<sup>15-16)</sup>。これらのことから「カミングアウト」は、極めて重要な行為であることが考えられる。また、性同一性障害者が、トイレの使用や制服の着用、男女別での授業の参加など、抱えている問題はあつものの、支援で求めているものは個別性が高い<sup>31)</sup>。つまり、性別違和感のある児童生徒が相談でき、それに対応するための環境づくりは極めて重要であると考えられる。

さらに、教諭及び養護教諭は、【本人を支持する必要性】や【多様性を受容する資質の必要性】を認識しており、石丸<sup>32)</sup>が、同性愛者が自尊心を低めずに生活するには、カミングアウトするかどうかよりも、相手からの受容が得られているかどうかということを優先して考慮する必要性を報告しているように、学校は、性別違和感を含めそのような児童生徒自身を受容することが必要であると推察される。

そして、岡崎ら<sup>20)</sup>は、支援をするには、教諭及び養護教諭の多くが、周りの生徒の正しい理解や理解してくれる友人が重要であると述べており、本研究においても「個性を認め合う学級経営が重要である」といった【個性を認める環境づくりの必要性】や【性別違和感に関する教育の必要性】を認識していた。中塚<sup>27)</sup>は、学校保健の役割において、他児童生徒が多様な性への理解を深めるための教育をあげ、加藤ら<sup>2)</sup>は、同性愛だけではなく異性愛を含めた全ての人びと、各々の差異を大切にす視点を育む教育の必要性を述べている。性別違和感のある児童生徒のいじめ被害の回避や望む性別で学校生活を送るための支援を行うためには、他児童生徒からの理解は重要であると考えられる。

これらのことから、教諭及び養護教諭が認識しているように、学校は、性別違和感に関する知識を高め、性別違和感のある児童生徒が相談しやすく、且つその性別違和感を含めて児童生徒自身を受容するとともに、児童生徒の望む学校生活について把握し、他児童生徒への対応を含め、校内組織体制のもと、本人を支援する環境を整えることが必要であると考えられる。

## 2-4 まとめ

小学校、中学校、高等学校に勤務する教諭、養護教諭への質問紙調査から、性別違和感のある児童生徒への学校における支援の実態について以下のことが明らかとなった。

教諭及び養護教諭の約3割に性別違和感のある児童生徒と出会った経験があり、約2割以下に性別違和感のある児童生徒へ支援した経験があつた。その支援は、中学生に多く、名簿上の性別の男子に多く確認された。教諭及び養護教諭は、性別違和感のある児童生徒への支援について必要な対応と教育現場における支援の困難さといった現状について考えており、性別違和感のある児童生徒への支援方法を学習することを要望していた。



### 3. 研究B

#### 3-1 目的

小学校、中学校、高等学校に勤務する教諭、養護教諭への面接調査から、性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容を明らかにすることとした。

#### 3-2 方法

##### (1) 対象

Y・Z県内の公立小学校・中学校・高等学校に勤務する性別違和感のある児童生徒への支援経験がある現職の教諭8名、養護教諭10名とした。対象支援事例は、教諭及び養護教諭による16事例であった。

対象者は、研究Aによって面接調査への協力を得られた教諭、養護教諭に加え、調査者が所属する大学院の現職の院生の紹介等により、本研究の主旨を説明した上で同意の得られた教諭、養護教諭であった。

##### (2) データ収集期間及びデータ収集方法

2013年1月～3月の3か月間に、半構造的面接法による面接調査を実施した。はじめに、教諭、養護教諭の属性や支援事例についての基礎調査を行った。そして、性別違和感のある児童生徒への支援を行った各々の事例についてインタビューガイドを用いて対象教諭、養護教諭へ面接を行った。面接は、対象教諭、養護教諭の許可を得て、ICレコーダーに録音した。

##### (3) データ収集内容

データ収集内容は、性別違和感のある児童生徒への教諭、養護教諭の支援の内容が明確になるよう、①支援のきっかけ、②児童生徒自身の性の捉え方、③支援の経過、④他児童生徒への配慮事項、⑤校内外関係者、関係機関との連携、⑥支援内容を振り返って思うこと、⑦性別違和感のある児童生徒へ今後どのような支援が必要であるかとして、きっかけから全般的な支援の経過を把握した。また、性別違和感に個別性があることを考慮し、対象児童生徒の性別違和感を捉えるため、教諭、養護教諭から見た児童生徒自身の性への捉えを聴取した。さらに、学級経営や児童生徒が不特定多数訪れる保健室の経営を考慮し、他児童生徒への配慮事項を聴取した。そして、今後、性別違和感のある児童生徒への支援の課題を明確にするため、支援内容を振り返った上で、性別違和感のある児童生徒へ今後どのような支援が必要となるのか教諭、養護教諭自身の考えについて面接を行った。

##### (4) 分析方法

Berelson, B.による内容分析法を用いた<sup>23)</sup>。分析は、まず、対象者から語られた支援事例から逐語録を作成し、教諭及び養護教諭が行った性別違和感のある児童生徒への支援の内容が含まれる文脈を抽出し、「支援データ」とした。支援データから支援の内容の類似した意味内容のものを集めて分類し、その意味内容を表すサブカテゴリを命名した。同様にサブカテゴリの類似した意味内容のものを集めて分類し、その意味内容を表すカテゴリを命名した。さらに、カテゴリの類似した意味内容のものを集めて分類し、その意味内容を表すコアカテゴリを命名し、全体として整理、分類した。また、支援データ総件数に対して、そのコアカテゴリ及びカテゴリの比率を示した。以下、コアカテゴリを【】、カテゴリを〔〕、サブカテゴリを< >、支援データを「」で示した。

また、内容的妥当性を検証するために、分析は質的研究者1名のスーパービジョンを受けながら実施した。さらに、質的研究の経験がある大学院生5名に分析内容を検討してもらい確認した。また、分析結果については、面接で語った内容が結果に十分反映されているか否か、対象者10名に確認した。

#### (5) 倫理的配慮

本研究は、「文部科学省・厚生労働省の疫学研究に関する倫理指針（平成20年）」<sup>24)</sup>に基づき、学校名、教諭名、養護教諭名、児童生徒などが個人のプライバシーについて遵守した。

本研究への理解、協力の得られた教諭、養護教諭の勤務する学校長と教諭、養護教諭に研究の趣旨及び方法、学校名、教諭、支援事例へのプライバシーの保護について依頼文を郵送し、調査について理解、協力を得た。対象者には事前に説明を書面及び口頭で行い、同意書によって研究参加の同意を得た。説明はすべて研究者が行った。

半構造的面接調査の許可についての説明内容は、面接の目的と方法、質問内容の概要、プライバシーの保護について、面接に参加した場合に予想される利益と不利益、面接への参加は任意であり、撤回の自由があること、個人が特定できないように配慮した。個人情報保護を遵守し、学校名、教諭名、養護教諭名、児童生徒などが特定できないよう匿名化されたデータをもとに分析を行った。

### 3-3 結果及び考察

#### (1) 対象教諭の属性

Y・Z県内の公立小学校・中学校・高等学校に勤務する性別違和感のある児童生徒への支援経験がある現職の教諭8名であった。対象教諭は、小学校3名、中学校3名、高等学校2名であり、男性6名、女性2名であった。平均年齢は49.6歳（標準偏差±8.8歳）、教員経験年数は26.4歳（標準偏差±8.8年）であった。対象支援事例における教諭の立場は、学級担任6名、教科担任1名、クラブ活動顧問1名であった。

#### (2) 対象養護教諭の属性

Y・Z県内の公立小学校・中学校・高等学校に勤務する性別違和感のある児童生徒への支援経験がある現職の養護教諭10名であった。対象養護教諭は、小学校2名、中学校3名、高等学校5名であり、全員女性であった。平均年齢は44.7歳（標準偏差±11.1歳）、教員経験年数は23.2年（標準偏差±11.5年）であった。

#### (3) 対象支援事例及び内容の概要

対象支援事例は16事例であり、その概要を表3に示した。対象児童生徒の校種は、小学校5名、中学校5名、高等学校6名であり、名簿上の性別は、男子7名、女子9名であった。支援の特徴は、対象児童生徒の仕草や言葉遣いなど学校生活の状況への性別違和感による支援が8名、対象児童生徒のカミングアウトによる支援が7名、校外関係者の情報提供による支援が1名であった。対象教諭及び対象養護教諭に対する面接時間は6分～40分であり、平均面接時間は18分であった。

#### (4) 性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容

性別違和感のある児童生徒への教諭の支援は、支援事例7例に対し、支援データは181件抽出された。

支援データ181件は、146項目のサブカテゴリ、45項目のカテゴリ、7項目のコアカテゴリに分類された。コアカテゴリは、【Ⅰ. 本人の状況を把握する】53件（29.3%）、【Ⅱ. 校内関係者と連

表3 対象支援事例の概要

事例	校種 学年	名簿上 の性別	支援番号	支援のきっかけ	支援期間	面接時間
1	小学校 5年生	男	1	異性的な仕草や言葉遣いが見られた。	H 6年4月～H 8年3月	22分
2	小学校 5年生	男	2	異性的な言葉遣いが見られた。	S63年4月～H 2年3月	6分
3	小学校	女	3	校外から性別違和感があるとの情報提供があった。	H24年4月～支援中	11分
	1年生		9	校外から性別違和感があるとの情報提供があった。	H24年4月～支援中	9分
4	中学校	男	4	悲しそうな表情で学級内にいつも一人であった。	H19年4月～H22年3月	18分
	1年生		5	学年教員から本人を経過観察するようにと報告があった。	H19年4月～H22年3月	14分
			12	異性の他生徒との関わりが多いと小学校からの申し送り事項があった。	H19年4月～H20年3月	15分
5	中学校 3年生	女	6	同性の他生徒との関わりについて他教員から報告があった。	H24年4月～H25年3月	12分
6	高等学校 3年生	女	7	保健体育時の感想用紙によってカミングアウトがあった。	H23年4月～H24年3月	26分
7	高等学校	女	8	望む性で登校したいという本人からのカミングアウトがあった。	H23年7月～H24年3月	27分
	3年生		16	本人のカミングアウトを受けたことについて相談員から報告を受けた。	H23年9月～H24年3月	25分
8	小学校 2年生	女	10	本人が異性のような傾向があると保護者から相談を受けた。	H20年8月～H23年3月	40分
9	小学校 4年生	男	11	担任から本人の異性的な言葉遣いや服装について相談を受けた。	H22年4月～H23年3月	10分
10	中学校 1年生	女	13	制服のスカートを履きたくないため、登校しづりがあった。	H23年8月～H24年3月	11分
11	中学校 1年生	男	14	本人の特徴的な高い声色に対する揶揄があった。	H20年4月～H23年4月	14分
12	中学校 3年生	男	15	異性的な仕草や言葉遣いが見られた。	H24年4月～H25年2月	26分
13	高等学校 3年生	男	17	同性を好きだと言う本人からのカミングアウトがあった。	H15年9月～H16年1月	12分
14	高等学校 2年生	女	18	制服のスカートを履かなくなったことで生徒指導上の問題があった。	H18年4月～H19年3月	9分
15	高等学校 2年生	女	19	来室が頻繁であり、対応中に本人からのカミングアウトを受けた。	H18年9月～H20年3月	21分
16	高等学校 2年生	女	20	学年主任が本人の性別違和感に気づき、その報告を受けた。	H23年6月～支援中	31分
合計	小5名、中5名、高6名		男子7名、女子9名		平均面接時間 18分	

携して本人を支援する】41件（22.7%）、【Ⅲ. 本人の学校生活の状況に応じて支援する】31件（17.1%）、【Ⅳ. 本人の考えや気持ちを理解する】19件（10.5%）、【Ⅴ. 保護者の理解のもと本人を支援する】15件（8.3%）、【Ⅵ. 本人への支援の拡充の必要性を認識する】12件（6.6%）、【Ⅶ. 校外関係者と連携して本人を支援する】10件（5.5%）が見出された（表4-1, 4-2, 4-3, 4-4, 4-5, 4-6, 4-7）。

また、性別違和感のある児童生徒への養護教諭の支援は、支援事例12例に対し、支援データは245件抽出された。支援データ245件は、194項目のサブカテゴリ、52項目のカテゴリ、6項目のコアカテゴリに分類された。コアカテゴリは、【Ⅰ. 本人の状況を把握する】78件（31.8%）、【Ⅱ. 校内関係者と連携して本人を支援する】55件（22.4%）、【Ⅲ. 本人の考えや気持ちを理解する】42件（17.1%）、【Ⅳ. 本人の学校生活の状況に応じて支援する】33件（13.5%）、【Ⅴ. 保護者や校外関係者と連携して本人を支援する】25件（10.2%）、【Ⅵ. 本人への支援の拡充の必要性を認識する】12件（4.9%）が見出された（表5-1, 5-2, 5-3, 5-4, 5-5, 5-6）。

#### (4)-1 本人の状況を把握する

性別違和感のある児童生徒への教諭及び養護教諭の支援では、本人の状況を把握することが最



も多くあげられた。また、本人の学校生活の状況を把握する必要性を認識していた。学校生活の状況において、教諭及び養護教諭は、本人と同級生又は他生徒との関わりや、学校での服装や制服着用の状況、学校行事での状況を把握していた。教諭は、同級生の本人への対応や着替えやトイレの使用状況、体育の授業参加の状況といった学級や授業での状況を把握し、養護教諭は、本人の保健室の利用に対する他生徒の様子や健康診断の状況といった保健室から捉えた本人の状況を把握していた。本人への関わり方の違いから、本人の状況の把握に教諭と養護教諭との間で違いが見られたと考えられる。また、性別違和感のある児童生徒にとって、学校は、呼称、トイレ、着替え、男女に分かれて行う活動、声を出すこと、宿泊行事の参加、制服などによる辛い状況があり<sup>8)</sup>、本研究においても、教諭及び養護教諭がそれらの状況を把握していることが認められた。さらに、性同一性障害では、いじめ被害が特に男子で早く始まる傾向にあり<sup>8)</sup>、男性同性愛者・両性愛者のいじめ被害が報告され<sup>10)</sup>、本研究においても名簿上の性別が男子の児童生徒は、同級生や他生徒からの揶揄が見られた。性別違和感のある児童生徒の早期発見や悩みや問題行動の把握のためには、異性や同性との関わりや男女別になる活動など性別に注視して本人の状況を把握することが必要であると考えられる。

また、教諭及び養護教諭は、本人の仕草や言葉遣い及び性別違和感に対する関係者の認識を把握していた。これは、本人への連携した支援について保護者や校内関係者の理解が得られるのか否かを検討することに必要であると考えられる。教諭は、他教員、保護者、同級生からの認識状況を把握しており、養護教諭は、加えて、管理職、担任、他生徒からの認識状況を把握していた。教諭と比較して本人を取り巻く多くの関係者の認識状況を把握していることから、校内組織による支援体制を視野に入れていることが推察される。さらに、家庭や本人の状況について、本人のきよ

表4-1 性別違和感のある児童生徒に対する教諭の支援カテゴリ (1)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
I 本人の状況を把握する	1. 本人と他生徒との関わりを把握する	1) 本人と異性の同級生との関わりを把握する
		2) 本人と同性の同級生との関わりを把握する
		3) 同級生の本人への理解について把握する
		4) 本人と同級生との関わりを把握する
		5) 同性の同級生の本人への対応を把握する
		6) 性別違和感のある他生徒の状況を把握する
	2. 本人の学校生活の状況を把握する	7) 本人の着替えの状況を把握する
		8) 本人の学校での着衣の状況を把握する
		9) 本人のトイレの使用状況を把握する
		10) 本人の一人称の使い方を把握する
		11) 本人の運動会での同性の競技参加の状況を把握する
		12) 本人の体育の授業参加の状況を把握する
	3. 本人の仕草や言葉遣いに対する関係者の認識状況を把握する	13) 本人の仕草や言葉遣いに対する他教員の認識状況を把握する
		14) 本人の仕草や言葉遣いに対する保護者の認識状況を把握する
		15) 本人の仕草や言葉遣いに対する同性の同級生の認識状況を把握する
	4. 本人の家庭の状況を把握する	16) 本人の家庭環境について保護者から情報収集する
		17) 本人の同性のきょうだいの関わりを把握する
		18) 本人の家庭での状況について同性の同級生から把握する
	5. 本人の思いを推測する	19) 学校生活を過ごす本人の思いを推測する
		20) 一人称の使い方についての指導に対する本人の思いを推測する
	6. 本人の状況の背景を探る	21) 本人の仕草や言葉遣いについて家庭環境を把握する
		22) 本人の異性の同級生との関わりについて学校生活の状況から推測する
	7. 本人のカミングアウトの有無を把握する	23) 本人の他教員へのカミングアウトの有無を把握する
		24) 本人の他生徒へのカミングアウトの有無を把握する
	8. 本人の性別違和感を推測する	25) 着替えの状況から本人の性別違和感を推測する
		26) 小学校の情報から本人の性別違和感を推測する
		27) 本人の脱毛から性別違和感を推測する
	9. 本人の性別違和感に対する関係者の認識状況を把握する	28) 本人の性別違和感に対する保護者の認識状況を把握する
		29) 本人の性別違和感に対する他教員の認識状況を把握する
	10. 本人の受診状況を把握する	30) 本人の受診状況を把握する
		31) 本人の診断結果を把握する

うだいや本人と一緒に活動する他生徒の性別に注目しており、教諭及び養護教諭は、本人の仕草や言葉遣い、性別違和感について、関わりの多い人物の影響を考慮していることが考えられる。教諭の支援では、学校生活を過ごす本人の思いや、本人の状況から性別違和感を推測することが示された。本人からのカミングアウトがなく、性別違和感の有無を疑いながら本人を支援するなかで、教諭は、本人の取り巻く状況から、学校生活を過ごす本人の思いを推測し性別違和感の有無を再確認し対応していることが推察される。養護教諭は、保健室や相談室といった本人の居場所を把握することや本人の保健室の来室理由を推測することが認められた。

さらに、教諭及び養護教諭は、本人の受診状況を把握していた。筆者ら<sup>19)</sup>の調査では、校内関係者の理解を得るため、本人の受診を促しており、保護者や校内関係者と連携した支援に、本人の受診状況を把握することは必要であると考えられる。また、同性愛者は、学校内部でセクシュアルマイノリティについて情報を集めることは難しく、学校外部で情報を集めるしかないと報告されているように<sup>21)</sup>、筆者ら<sup>19)</sup>の研究と同様に、本研究においても、本人が性別違和感のある他者と情報交換していることが認められた。学校において、多様な性を取り扱う教育内容は少なく<sup>11)28)</sup>、学校は性別違和感に関する適切な情報提供を行う必要があると考えられる。さらに、養

表4-2 性別違和感のある児童生徒に対する教諭の支援カテゴリ (2)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
Ⅱ ・校内関係者と連携して本人を支援する	11. 本人との関わりが多い教諭と本人について情報を共有する	32) 本人の学校生活の状況について担任に報告する
		33) 本人への指導について担任に相談する
		34) 本人の受診状況を担任から把握する
		35) 本人が脱毛していることを担任に報告する
		36) 本人の仕草や言葉遣いについて前担任から情報収集する
		37) 本人への指導について学年主任に相談する
		38) 本人の同性の他生徒との関わりについて同性の教諭と情報を共有する
		39) 本人の性別違和感について学年教員から情報収集する
	12. 全教員で本人について共通理解を図る	40) 本人の他生徒へのカミングアウトについて全教員で共通理解を図る
		41) 本人への支援体制について全教員で共通理解を図る
		42) 本人のトイレの使用方法について全教員と共通理解を図る
		43) 本人の男女別で行う学校行事での対応について全教員と共通理解を図る
	13. 他教職員の本人への支援状況を把握する	44) 本人の他教員へのカミングアウトについて全教員と共通理解を図る
		45) 本人への支援について学年主任が管理職に報告したことを把握する
		46) 本人に対する養護教諭と相談員の支援状況を把握する
	14. 他教職員と本人について協議する	47) 本人の望む支援方針に対する管理職と委員会の理解を把握する
		48) 全教員への本人の性別違和感に関する研修会の進捗状況を把握する
	15. 他教員と本人について共通理解を図る	49) 本人への支援について学年主任と同性の教諭と養護教諭と協議する
		50) 本人の学校での着衣について管理職と委員会と学年教員と協議する
		51) 本人への支援について養護教諭と相談員と協議する
	16. 支援チームで本人について協議する	52) 本人への支援の仕方について管理職と養護教諭と共通理解を図る
		53) 本人の性別違和感について委員会で情報を共有する
		54) 保健室での本人の対応について養護教諭と共通理解を図る
	17. 全教員で学校での着衣について協議する	55) 支援チームで本人の支援について全教員の共通理解の必要性を協議する
		56) 支援チームで本人の他生徒へのカミングアウトについて検討する
		57) 支援チームで本人への支援の内容を協議する
	18. 本人との関わりが多い教諭と本人について共通理解を図る	58) 着衣に関する校則改善の必要性を全教員に提案する
		59) 着衣に関する校則改善を全教員で検討する
	19. 他教員に本人について報告する	60) 本人の望む学校での着衣について全教員で協議する
		61) 本人の仕草や言葉遣いについて前担任と共通理解を図る
	20. 学年教員と本人について協議する	62) 本人への支援の仕方について学年主任と共通理解を図る
		63) 本人への指導について管理職と養護教諭に相談する
	21. 支援チームで教員対象の研修会を行う	64) 本人の着替えの問題を管理職と養護教諭に報告する
		65) 本人の性別違和感を考慮した学校行事の宿泊先について学年教員と協議する
	22. 支援チームで本人について共通理解を図る	66) 本人の望む支援方針について学年教員と検討する
		67) 支援チームで全教員への本人の性別違和感に関する研修会を企画する
		68) 支援チームで全教員への本人の性別違和感に関する研修会を行う
		69) 支援チームで本人の他生徒へのカミングアウトの仕方について共通理解を図る
		70) 支援チームで本人への支援体制について共通理解を図る

護教諭は、本人の恋愛の状況や望む性でのアルバイトの状況といったプライベートに関わる内容について把握しており、本人の学校内外双方の状況を把握しやすい立場であることが推察される。

そして、本人の状況の把握において、把握する内容に教諭と養護教諭との間に違いが見られたことから、本人の状況を的確に把握するために、教諭及び養護教諭との間で情報の共有をすることが必要であると考えられる。しかしながら、本人のプライベートについて、教諭または養護教諭以外の他者と情報を共有するか否かについては、本人のプライバシーについて考慮する必要があると考える。

#### (4)-2 本人の考えや気持ちを理解する

性別違和感のある児童生徒への支援について、教諭及び養護教諭は、本人の考えや気持ちを理解していた。また、教諭は、本人の話を聞く必要性を認識していた。教諭及び養護教諭は、性別違和感について本人の話を聞くことや、呼称や制服着用、トイレの使用、学校行事の参加といった望む性別で学校生活を過ごしたい本人の思いを理解していた。教諭は、本人のカミングアウト後に同性のトイレを使用する本人の辛さを理解し、養護教諭は、本人の性別違和感の自覚やカミングアウトの有無に関わらず、異性のような仕草や言葉遣いへの教諭の指導や他生徒の反応、制服着用、性を取り扱う授業、将来の生き方、保護者から理解が得られないといった辛さを理解していることが認められた。また、当事者の多くが教員による不適切な発言、蔑視表現を受けているよう<sup>2)27-28)</sup>に、本研究においても、性別違和感のある児童生徒への教諭による不適切な指導が認められた。山田<sup>28)</sup>は、教員が蔑視表現することによって、性別違和感のある児童生徒の人格を否定するだけではなく、そのような蔑視を他児童生徒に容認させ、教員へのカミングアウトについて距離感を感じさせていると述べている。学校は、性別違和感のある児童生徒が辛い思いをせずに、カミングアウトしやすいよう、性別違和感について理解し、性別違和感のある児童生徒が在籍することを念頭におく必要があると考えられる。

表4-3 性別違和感のある児童生徒に対する教諭の支援カテゴリ (3)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
Ⅲ 本人の 学校生活の 状況に 応じて 支援する	23. 本人について同級生を指導する	71) 本人への揶揄について同級生を指導する
		72) 本人への理解について同級生を指導する
		73) 本人の仕草や言葉遣いについて随時同級生を指導する
		74) 本人の着替えの仕方について同級生を指導する
		75) 本人への対応について異性の同級生を指導する
		76) 本人への対応について同性の同級生を指導する
	24. 本人のカミングアウトを支持する	77) 本人のカミングアウトを受け入れる
		78) 本人の将来の生き方を支持する
		79) 性別違和感のある他生徒の学校での着衣の状況を本人に伝える
		80) 望む性別で学校生活を過ごす本人を見守る
		81) 本人が望む性別で学校生活を過ごすことを同級生に発表する
		82) 本人のカミングアウトによって生じる同性の他生徒との問題を推測する
		83) 望む性別の学校での着衣を本人が試着したことを把握する
	25. 学校生活の過ごし方について本人を指導する	84) トイレの使用法について本人を指導する
		85) 同性の同級生との関わりについて本人を指導する
		86) 着替えの仕方について本人を指導する
	26. 本人の状況に応じて対応する	87) 一人称の使い方について本人を指導する
		88) 本人の着替えの場所を検討する
		89) 本人の仕草や言葉遣いを個性として認識し対応する
		90) 学校生活での問題について本人から話を聞く
	27. 本人に学校の支援方針を伝える	91) 同性の他生徒との関わりについて本人の思いを考慮し対応する
		92) 本人の望む学校での着衣について学校の許可が必要であることを本人に伝える
		93) 学校の支援体制が整ったことを本人に伝える
	28. 本人の抱える問題が解決したことを把握する	94) 本人の望む性別の学校での着衣に関する条件について本人に伝える
		95) 本人の着替えの問題が解決したことを把握する
29. 本人のカミングアウト後に同級生に対応する		96) 本人の学校での着衣の問題が解決したことを把握する
		97) 本人のカミングアウト後、本人の同級生から相談を受ける
		98) 本人のカミングアウト後、本人の同級生に指導する



表4-4 性別違和感のある児童生徒に対する教諭の支援カテゴリ (4)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
IV ・ 本人の 考えや 気持ちを 理解する	30. 性別違和感のある本人の気持ちを理解する	99) 同性のトイレを使用する本人の辛さを把握する
		100) 教諭に対する本人の信頼感を把握する
		101) 宿泊行事に参加した本人の気持ちを把握する
		102) 性別違和感について本人から話を聞く
		103) 他生徒からの理解に対する本人の気持ちを把握する
	31. 望む性別で学校生活を過ごしたい本人の思いを把握する	104) 本人の望む学校生活の過ごし方を把握する
		105) 学校での着衣について本人と面談する
		106) 学校での着衣について本人と保護者から依頼を受ける
		107) 望む性別で卒業式に参加したい本人の思いを把握する
	32. 他教員へのカミングアウトに対する本人の考えを把握する	108) 養護教諭へのカミングアウトの許可を本人から得る
		109) 全教員へのカミングアウトについて本人に確認する
		110) 全教員へのカミングアウトの許可を本人から得る
	33. 性別違和感に対する本人の考えを把握する	111) カミングアウトに対する本人の思いを把握する
		112) 本人の性別適合手術に対する思いを把握する
	34. 保護者へのカミングアウトに対する本人の考えを把握する	113) 保護者へのカミングアウトについて本人に確認する
		114) 保護者へのカミングアウトの許可を本人から得る

また、本人は性別違和感によって生じる辛さを感じる一方で、教諭や支援への信頼感をもっていった。教諭は、本人への支援のきっかけとなった保健体育の授業で自分らしく生きること話すことや時間をかけて根気よく本人の話を聞く姿勢が見られ、そのような教諭の態度は、本人への理解を示し、カミングアウトしやすかったことが推察される。本人の辛い気持ちを受け止めることで、本人の支援への必要性を再認識するとともに、支援への肯定的な気持ちを把握することは、教諭及び養護教諭が効果的な支援を実感し、次の支援への自信になると考えられる。

このような本人の考えや気持ちを理解することは、教諭に比べて養護教諭の支援に多く見られた。本研究において、教諭は、本人の性別違和感の有無について、本人の状況を把握し、その状況から本人の思いを推測するに留まり、本人のカミングアウトによって、本人の考えや気持ちを初めて理解していた。養護教諭は、本人の性別違和感の自覚やカミングアウトの有無に関わらず、保健室での本人との関わりから、本人の問題行動を認識し、日常的な関わりのなかで本人の考えや気持ちを理解していた。児童生徒の心身の健康問題を発見しやすい職務の特性から<sup>11)33)</sup>、養護教諭は、性別違和感のある児童生徒の心身の健康問題に気が付きやすく、本人の考えや気持ちを理解していたと推察される。

#### (4)-3 本人及び他児童生徒に対応する

性別違和感のある児童生徒への支援について、教諭及び養護教諭は、本人の学校生活の状況を考慮した指導の必要性を認識していた。教諭は、本人の異性のような仕草や言葉遣いが同級生に

表4-5 性別違和感のある児童生徒に対する教諭の支援カテゴリ (5)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
V ・ 保護者 の 支援 理解 する もと 本人 を	35. 保護者と本人について話し合う	115) 本人の仕草や言葉遣いについて保護者から話を聞く
		116) 本人の学校生活の状況を保護者に伝える
		117) 本人の性別違和感について保護者から情報収集する
	36. 本人と保護者を専門機関につなぐ	118) 本人と専門医療機関に行くよう保護者に促す
		119) 本人の性別違和感に関する専門医療機関を調べる
		120) 専門医療機関の情報を保護者に提供する
	37. 家族の本人への理解を把握する	121) 保護者の本人への理解について把握する
		122) 家族の本人への理解について把握する
		123) 保護者の本人の進路への理解について把握する
	38. 保護者に本人への学校の支援について伝える	124) 本人への学校の支援方針を保護者に伝える
		125) 支援に必要な環境整備について本人と保護者に伝える
		126) 学校生活における支援方針を本人と保護者に伝える
	39. 保護者と本人について共通理解を図る	127) 学校の支援方針について保護者と共通理解を図る
		128) 学校と主治医との面談の内容について本人と保護者と共通理解を図る

表4-6 性別違和感のある児童生徒に対する教諭の支援カテゴリ (6)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
の VI 拡充 本人 の 必要 性の 支 援	40. 関係者と連携した支援の必要性を認識する	129) 本人の仕草や言葉遣いについて保護者から情報収集する必要性を認識する
		130) 本人への支援について養護教諭と専門機関と連携する必要性を認識する
		131) 本人への支援について同性の教諭と連携する必要性を認識する
		132) 着衣に関する校則改善の必要性を認識する
	41. 本人への今後の対応の必要性を認識する	134) 本人の学校生活の状況を把握する必要性を認識する
		133) 本人の仕草や言葉遣いを考慮した指導の必要性を認識する
	42. 本人から話を聞く必要性を認識する	135) 学校生活での問題について本人から話を聞く必要性を認識する
		136) 同性の他生徒との関わりについて本人から話を聞く必要性を認識する

表4-7 性別違和感のある児童生徒に対する教諭の支援カテゴリ (7)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
VII 校外 関係 者を 支援 する	43. 学校と主治医とで本人について情報を共有する	137) 管理職と相談員とで本人の主治医と面談する
		138) 本人の支援体制について主治医に相談する
		139) 本人について主治医から情報収集する
		140) 主治医に本人の支援の内容を報告する
	44. 主治医から本人について助言を受ける	141) 本人のカミングアウトの仕方について主治医から助言を受ける
		142) 学校の支援体制について主治医から助言を受ける
		143) 全教員への本人の性別違和感に関する研修会の必要性について主治医から助言を受ける
		144) 本人の支援に対する保護者の共通理解の必要性について主治医から助言を受ける
	45. 校外関係者と本人に対応する	145) 本人の性別違和感を考慮した宿泊行事の参加の仕方について旅行会社と共通理解を図る
		146) 本人との面談を校外のカウンセラーに依頼する

特別視されないように配慮して対応することと、他生徒がいる場所を避けて本人と面談する空間を確保していた。養護教諭は、本人が相談しやすい空間を保障し、本人に対して性差を意識するような発言を避け、性別違和感について理解を示すよう意識して対応していた。これらの配慮は、性別違和感のある児童生徒は不登校やいじめ被害等があり<sup>9)11)</sup>、カミングアウトによって生じる問題や葛藤があることから<sup>8)12)27)</sup>、性別違和感があることによって生じる問題を回避したり、本人が安心してカミングアウトしたりするために必要であると考えられる。

また、本人への揶揄や理解について、教諭は同級生を、養護教諭は他児童生徒を指導していたことが認められた。教諭は、本人への同級生の対応の仕方について、同性と異性で対応の仕方を分けて指導していることが見られた。この対応は、教諭が本人の性自認を十分に理解し、本人と同級生との関わりを的確に把握したからこそできた対応であると推察される。教諭及び養護教諭が性別違和感のある児童生徒への対応のために重要だと考えることについて、周囲の生徒の正しい理解や理解してくれる友達をあげている<sup>20)</sup>。学校は、仕草や言葉遣い、性別違和感によって生じる本人の悩みや問題行動<sup>9)11)27)</sup>を回避するためにも、同級生や他児童生徒に本人への理解を促すことは必要不可欠であると考えられる。教諭の本人への対応では、本人の仕草や言葉遣いを個性としての認識すること、着替えの場所を検討すること、本人から話を聞くこと、本人の思いを考慮すること、トイレの使用方法や着替えの仕方、一人称の使い方を指導することがあげられた。また、本人に同性との関わりについて指導していた。性同一性障害においては、同性の仲間と進んで交わるように援助することで、長期的な精神的問題の発展を防ぐ可能性をもっていることから<sup>8)</sup>、同級生や他児童生徒への指導とともに、本人が異性と同性の双方との関わりがもてるよう指導したり、そのような機会を意図的に作ったりすることが必要であると考えられる。養護教諭では、学校での服装や校則遵守について本人を指導することや、保健室で本人の学校生活での活動を支持すること、名簿上の性別で健康診断を行うことがあげられた。

さらに、教諭及び養護教諭は、カミングアウトを支持することにおいて、本人のカミングアウト

表5-1 性別違和感のある児童生徒に対する養護教諭の支援カテゴリ (1)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
I 本人の状況を把握する	1. 本人と他生徒との関わりを把握する	1) 本人と異性の他生徒との関わりを把握する
		2) 本人と同級生との関わりを把握する
		3) 他生徒の本人への理解について把握する
		4) 本人の仕草や言葉遣いに対する他生徒の様子を把握する
		5) 本人が他生徒に揶揄されていることを把握する
		6) 本人の保健室の利用に対する他生徒の様子を把握する
	2. 本人の学校生活の状況を把握する	7) 本人の仕草や言葉遣いを把握する
		8) 本人の学校での着衣の状況を把握する
		9) 本人の健康診断の状況を把握する
		10) 本人の相貌を把握する
		11) 本人の入学式の状況を把握する
	3. 本人の仕草や言葉遣いに対する関係者の認識状況を把握する	12) 本人の仕草や言葉遣いに対する他生徒の認識状況を把握する
		13) 本人の仕草や言葉遣いに対する担任の認識状況を把握する
		14) 本人の仕草や言葉遣いに対する管理職の認識状況を把握する
		15) 本人の仕草や言葉遣いに対する他教員の認識状況を把握する
		16) 本人の仕草や言葉遣いに対する保護者の認識状況を把握する
		17) 本人の仕草や言葉遣いに対する異性の同級生の認識状況を把握する
	4. 本人の状況の背景を探る	18) 着替えの状況から本人の性別違和感を推測する
		19) 本人の仕草や言葉遣いについて異性のきょうだいの状況を把握する
		20) 本人の異性の他生徒との関わりについて学校生活の状況から推測する
		21) 本人の不登校を把握する
		22) 本人の不登校の理由を推測する
		23) 本人の仕草や言葉遣いから一人称の使い方を把握する
		24) 本人の仕草や言葉遣いから生育歴を調べる
		25) 本人の進路について家庭環境を把握する
	5. 本人の性別違和感に対する関係者の認識状況を把握する	26) 本人の性別違和感に対する他生徒の認識状況を把握する
		27) 本人の支援について他教員の認識状況を把握する
		28) 本人の性別違和感に対する他教員の認識不足を把握する
	6. 本人の校外の状況を把握する	29) 本人が性別違和感のある他者と情報交換をしていることを把握する
		30) 本人が受診していることを把握する
		31) 本人が望む性別でアルバイトをしていることを把握する
	7. 本人の家庭の状況を把握する	32) 性別違和感について本人への保護者の対応を把握する
		33) 本人と保護者との関わりを把握する
		34) 本人と同性のきょうだいとの関わりを把握する
		35) 本人と保護者への同性のきょうだいの対応について本人から話を聞く
	8. 同性の相手との関わりを把握する	36) 本人に同性の相手がいることを把握する
		37) 本人と同性の相手との関わりを把握する
		38) 本人との関わりについて同性の相手の話を聞く
	9. 本人の学校生活での居場所を把握する	39) 本人の居場所が保健室であることを認識する
		40) 本人が相談室で過ごすことを把握する
	10. 本人の性別違和感に対する他教員の理解について推測する	41) 相談室での本人の様子を把握する
		42) 本人の性別違和感に対する他教員の理解について推測する
	11. 本人のカミングアウトの状況を把握する	43) 本人の性別違和感に対する担任の理解について推測する
		44) 保護者へのカミングアウトを把握する
		45) 本人の他生徒へのカミングアウトを把握する
	12. 他教員の本人への指導を把握する	46) 本人の仕草や言葉遣いに対する教諭の指導を把握する
		47) 学校での着衣に対する他教員の指導について把握する
	13. 本人の来室理由を推測する	48) 学級での状況から本人の来室理由を推測する
		49) 家庭環境から本人の来室理由を推測する
	14. 本人のカミングアウトに対する他生徒の状況を把握する	50) 本人のカミングアウト後の他生徒の反応を把握する
		51) 本人のカミングアウトに対する他生徒の思いを把握する

を受け入れ、本人の様子を見守っていた。教諭は、本人の将来の生き方を支持すること、本人が望む性別で学校生活を過ごすことへの準備をしていた。養護教諭は、継続して本人の話を聞く、着衣について本人の相談にのる、学校の支援方針について本人に説明する、カミングアウトの仕方について本人を指導する、性別違和感に関する研修会に参加した思いを本人に伝えることをしていた。このように、本研究において、教諭及び養護教諭ともに本人への様々な対応が見られた。性別違和感のある児童生徒の抱える悩みや問題には個別性が高く、支援の形式化によって本人に望まれる支援への弊害があることが懸念されている<sup>8)</sup>。性別違和感のある児童生徒への対応は、



表5-2 性別違和感のある児童生徒に対する養護教諭の支援カテゴリ (2)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
Ⅱ ・ 校 内 関 係 者 と 連 携 し て 本 人 を 支 援 す る	15. 他教員と本人について共通理解を図る	52) 本人への対応の仕方について複数配置の養護教諭と共通理解を図る
		53) 本人への学校の支援方針を把握する
		54) 保護者への支援体制について他教員と共通理解を図る
		55) 本人の仕草や言葉遣いを指導した教諭への対応について学年教員と共通理解を図る
		56) 本人への支援について担任と生徒指導教員と保健体育の教科担任と共通理解を図る
		57) 本人の保健室の利用の仕方について担任と共通理解を図る
		58) 本人への支援について生徒指導教員と保健体育の教科担任と共通理解を図る
	16. 担任と本人について情報を共有する	59) 本人の着替えの状況について担任から把握する
		60) 保護者の本人についての相談内容を担任に報告する
		61) 本人に対する保護者の思いを担任に報告する
		62) 本人の学級での状況について担任から把握する
		63) 本人の擲論について他生徒を指導したことを担任に報告する
		64) 本人の仕草や言葉遣いについて担任に報告する
		65) 本人の性別違和感について担任に報告する
	17. 学年教員と本人について情報を共有する	66) 本人の保健室での状況について学年教員に報告する
		67) 本人について学年教員と情報交換する
		68) 本人の仕草や言葉遣いについて学年教員から把握する
		69) 本人の仕草や言葉遣いを指導した教諭の思いを学年教員とともに把握する
		70) 本人の学級での状況について学年教員と情報交換する
		71) 本人の性別違和感を学年教員に報告する
	18. 担任の本人への支援状況を把握する	72) 担任が本人の名簿上の性別で対応していることを把握する
		73) 本人への学級での担任の対応について把握する
		74) 担任が本人への支援について管理職に報告したことを把握する
		75) 担任が本人の辛さを認識していることを把握する
		76) 保護者に対する担任の対応について把握する
		77) 本人のアルバイト関係者と担任が情報交換したことを把握する
	19. 他教員と本人について情報を共有する	78) 本人の学校生活の状況について委員会で情報を共有する
		79) 本人への支援について管理職と担任と情報交換する
		80) 本人に対する保護者への対応について管理職と担任に報告する
		81) 本人の気持ちを管理職と学年教員に報告する
	20. 他教職員の本人への支援状況を把握する	82) 本人の宿泊行事に対する他教員の支援状況を把握する
		83) 保護者に対する相談員の対応状況を把握する
		84) 本人の学校生活の状況についてクラブ活動の顧問が見守っていることを把握する
		85) 全教員への性別違和感に関する研修会の進捗状況を把握する
	21. 本人と関わりの多い教諭と本人について情報を共有する	86) 本人の仕草や言葉遣いを指導した教諭の思いを把握する
		87) 本人の仕草や言葉遣いについて前担任と情報交換する
		88) 本人の学校生活での状況について担任とクラブ活動の顧問と情報交換する
		89) 本人の性別違和感について生徒指導教員と保健体育の教科担任に報告する
	22. 支援チームと連携して本人を支援する	90) 支援チームで本人の着替えやトイレの使用の方法について検討する
		91) 支援チームで本人のカミングアウトによって生じる課題を検討する
		92) 支援チームでカミングアウトの仕方について本人と共通理解を図る
		93) 支援チームで全教員への性別違和感に関する研修会を行う
	23. 管理職に本人について報告する	94) 本人への支援状況を管理職に報告する
		95) 本人の性別違和感について管理職に報告する
	24. 全教員で本人の支援について共通理解を図る	96) 運動会での本人の対応について全教員と共通理解を図る
		97) 本人の支援方針について全教員で共通理解を図る
	25. 管理職の本人への支援状況を把握する	98) 管理職の本人への支援に対する理解を把握する
		99) 本人への支援チームを管理職が編成したことを把握する
	26. 学年教員の本人への支援状況を把握する	100) 学年教員が本人のカミングアウトの準備をしていることを把握する
		101) 学年教員が本人の性別違和感について他生徒に説明したことを把握する

本人の状況や考え、気持ちを的確に把握し、本人の望む対応をすることが必要であると考えられる。そして、養護教諭は、本人の性別違和感について、戸惑いを感じるものの、資料を集めたり、研修会に参加したりして情報収集し、本人への理解に努めていた。菊池ら<sup>18)</sup>の調査において、性別違和感に関する講演会を聞くことで、教員の性別違和感のある児童生徒へ対応する意識が高まったことがあげられ、本人への性別違和感への理解や適切な対応のためには、性別違和感に関する知識を深め、性別違和感のある児童生徒に理解を示し、対応方法を学ぶことが必要であると考えられる。

#### (4)-4 連携した支援を視野に入れ、本人の保護者へ対応する

性別違和感のある児童生徒の保護者への対応において、教諭は、本人について保護者から情報

表5-3 性別違和感のある児童生徒に対する養護教諭の支援力カテゴリ (3)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
Ⅲ・本人の考えや気持ちを理解する	27. 学校生活を過ごす本人の思いを把握する	102) 他生徒との関わりに対する本人の思いを把握する
		103) 健康診断に対する本人の思いを相談員から把握する
		104) 望む性別で卒業式に参加したい本人の思いを把握する
		105) 本人が望む学校生活について本人と保護者から依頼を受ける
		106) 名簿上の性別に対する本人の思いを推測する
		107) 学校での着衣について本人から話を聞く
		108) 学校の支援方針に対する本人の思いを把握する
		109) 望む性別の着衣を着たい本人の思いを把握する
	28. 性別違和感への理解に対する本人の気持ちを把握する	110) 望む性別で卒業式に参加した本人の喜びを把握する
		111) 性別違和感のある他者との関わりに対する本人の安心感を把握する
		112) 本人の学校生活が充実していることを把握する
		113) 教員に対する本人の信頼感を把握する
	29. カミングアウトに対する本人の考えを把握する	114) 他教員へのカミングアウトに対する本人の安心感を把握する
		115) カミングアウトに対する本人の思いを把握する
		116) カミングアウトに対する本人の葛藤を把握する
	30. 性別違和感のある本人の辛さを把握する	117) 他教員へのカミングアウトに対する本人の思いを把握する
		118) 性別違和感を抱えて学校生活を過ごす本人の辛さを把握する
		119) 性別違和感を自覚した本人の辛さを把握する
	31. 将来の治療に対する本人の思いを把握する	120) 将来の生き方に対する本人の葛藤を把握する
		121) 性別適合手術に対する本人の思いを把握する
		122) 受診に対する本人の思いを把握する
	32. 関係者に理解されない本人の辛さを把握する	123) 将来の治療に対する本人の期待感を把握する
		124) 保護者に理解されない本人の辛さを把握する
		125) 仕草や言葉遣いを理解されない本人の辛さを把握する
	33. 他生徒との関わりについて本人から話を聞く	126) 友人関係について本人の話を聞く
		127) 異性の同級生について本人の話を聞く
		128) 同級生からの揶揄について本人から話を聞く
	34. 学校生活を過ごす本人の辛さを把握する	129) 異性の友人が好きな同級生を好きになった本人の辛さを把握する
		130) 学校での着衣に対する本人の辛さを把握する
		131) 性を取り扱う授業の内容に対する本人の辛さを把握する
	35. 仕草や言葉遣いを指摘される本人の辛さを把握する	132) 仕草や言葉遣いへの教諭の指導に対する本人の辛さを把握する
		133) 仕草や言葉遣いへの他生徒の反応に対する本人の辛さを把握する
	36. 性別違和感について本人から話を聞く	134) 幼時期からある性別違和感について本人から話を聞く
		135) 性別違和感をもつ辛さについて相談員とともに本人から話を聞く

収集する必要性を認識し、保護者の理解のもとで本人を支援していた。養護教諭は、本人の家庭環境を考慮したり保護者と連携したりする支援の必要性を認識し、保護者の思いを把握することと保護者と本人について話し合うことが見られた。教諭は、本人の状況について学校と家庭で情報交換をし、家族の本人への理解を把握し、保護者に学校の支援方針や内容を伝え、共通理解を図っていた。また、性同一性障害の疑いがある場合に、専門医療機関を調べ、保護者に提示していた。性別違和感のある児童生徒への学校の役割に保護者への性同一性障害に関する情報提供があげられており<sup>27)</sup>、保護者と本人とを専門医療機関につなぐことが認められた。また、養護教諭は、保護者と面談し、保健室での活動や支援の状況を伝え、加えて本人に対する保護者の思いを把握していた。教諭は、今後の本人への支援について保護者への理解を必要と判断し対応しており、養護教諭は、本人の保護者の思いや家庭環境を考慮することを軸に本人への支援について保護者へ慎重に対応していることが推察される。

また、子からのカミングアウトはその家族にとっても心理的負荷を伴う重大な出来事であり<sup>34)</sup>、本研究においても、保護者が本人の性別違和感を信じたくない気持ちや、性別違和感への戸惑い、思春期での一時的な勘違いであると思っていることが認められた。その一方で、本人は、受診や将来の性別適合手術を視野に入れた生き方について保護者の理解が得られないことへの辛さを抱えていた。つまり、性別違和感のある児童生徒への支援は、本人の今後の生き方を支持すること

表5-4 性別違和感のある児童生徒に対する養護教諭の支援カテゴリ (4)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
IV 本人の学校生活の状況に応じて支援する	37. 本人のカミングアウトを支持する	136) 継続して本人の話を聞く
		137) 本人と異性の他生徒との関わりを見守る
		138) 本人のカミングアウトを受け入れる
		139) 本人の支援に連携を必要とする他教員を検討する
		140) 着衣について本人の相談にのる
		141) 学校の支援方針について本人に説明する
		142) カミングアウトの仕方について本人を指導する
		143) 性別違和感に関する研修会に参加した思いを本人に伝える
	38. 学校生活について本人に対応する	144) 学校での着衣について本人を指導する
		145) 本人の学校生活での活動を支持する
		146) 名簿上の性別で本人の健康診断を行う
		147) 校則遵守について本人を指導する
	39. 本人の性別違和感について情報収集し理解する	148) 本人の性別違和感に戸惑う
		149) 本人の性別違和感を理解する
		150) 本人の性別違和感について情報収集する
		151) 性別違和感のある児童生徒への支援について他校の養護教諭から情報収集する
	40. 本人の過ごしやすい空間を保障する	152) 性別違和感に関する研修会に参加する
		153) 本人の健康診断の時間を個別に確保する
		154) 他生徒との関わりについて本人の思いを考慮し対応する
		155) 学校生活での本人の居場所を作る
	41. 本人の辛さを受容する	156) 本人が相談しやすい空間を確保する
		157) 性別違和感のある本人の辛さを受容する
		158) 仕草や言葉遣いへの教諭の指導による辛さについて本人を励ます
	42. 本人について他生徒を指導する	159) 同級生の揶揄に対する本人の辛さを受容する
		160) 本人への揶揄について他生徒を指導する
		161) 本人への理解について他生徒を指導する
	43. 本人の学校生活での問題が解決したことを把握する	162) 本人の保健室の利用について他生徒を指導する
		163) 本人の着替えの問題が解決したことを把握する
		164) 本人の学校での着衣の問題が解決したことを把握する

表5-5 性別違和感のある児童生徒に対する養護教諭の支援カテゴリ (5)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
V 保護者や校外関係者と連携して本人を支援する	44. 本人に対する保護者の思いを把握する	165) 本人の性別違和感に対する保護者の思いを把握する
		166) 学校の本人への支援に対する保護者の信頼感を把握する
		167) 本人の将来に対する保護者の思いを推測する
		168) 本人のカミングアウトを受け入れられない保護者の気持ちを把握する
	45. 教育委員会と本人について共通理解を図る	169) 本人について管理職と共に教育委員会から情報収集する
		170) 性別違和感のある児童生徒への支援について教育委員会から情報収集する
		171) 本人への支援の仕方について教育委員会から助言を受ける
		172) 本人への今後の支援方針について教育委員会と共通理解を図る
	46. 保護者と本人について話し合う	173) 本人について保護者と面談する
		174) 養護教諭自身の本人への支援の仕方を保護者に伝える
		175) 本人の保健室での状況を保護者に伝える
	47. 校外カウンセラーと本人について情報交換する	176) 本人の状況について臨床心理士に相談する
		177) 本人の状況について臨床心理士から助言を受ける
		178) 本人について相談員と校外スクールカウンセラーと情報交換する
	48. 主治医と本人について共通理解を図る	179) 本人について保護者と主治医から情報収集する
		180) 学校と本人の主治医との連絡が取れていることを把握する
		181) 本人への対応について主治医から助言を受ける
	49. 転勤のため本人について養護教諭に引き継ぐ	182) 転勤のため本人への支援体制について養護教諭に引き継ぐ
		183) 転勤のため本人への支援の経過について養護教諭に引き継ぐ
	50. 校外カウンセラーと本人のカミングアウトについて協議する	184) 本人のカミングアウトの仕方について相談員と校外スクールカウンセラーで検討する
		185) 本人のカミングアウトの仕方について校外スクールカウンセラーから助言を受ける

表5-6 性別違和感のある児童生徒に対する養護教諭の支援カテゴリ (6)

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
Ⅵ 本人の必要への支援の認識	51. 本人の状況を考慮した支援の必要性を認識する	186) 本人の学校生活の状況を把握する必要性を認識する
		187) 本人の家庭環境を考慮した支援の必要性を認識する
		188) 本人の仕草や言葉遣いを考慮した指導の必要性を認識する
		189) 性別違和感によって生じる本人の将来の課題を推測する
		190) 本人の気持ちを尊重した指導の必要性を認識する
		191) 本人の性別違和感を考慮した対応の必要性を認識する
	52. 関係者と連携した支援の必要性を認識する	192) 本人への支援について担任と連携する必要性を認識する
		193) 本人への支援について保護者と連携する必要性を認識する
		194) 本人への支援について他教員と連携する必要性を認識する



を視野に入れ、保護者へ対応することが必要不可欠であると考えられる。

#### (4)-5 校内関係者との連携によって本人を支援する

教諭及び養護教諭は、校内関係者との連携による支援の必要性を認識していた。本研究では、組織的に支援を行う場合において、校長や教頭、養護教諭が組織の構成員としてあげられた。平成20年の中央教育審議会答申<sup>33)</sup>では、子どもの現代的な健康課題の解決などを図るためには、校長のリーダーシップの発揮が求められている。つまり、性別違和感のある児童生徒に対して、組織的に支援する際には、管理職によるリーダーシップが必要であると考えられる。

本研究において、教諭では、連携において大きな支障がなく、学年教員や養護教諭、校内委員会、全教員で本人について協議し共通理解を図ること多かった。養護教諭では、他教員の本人への認識状況や理解によっては、他教員との連携に支障がみられ、担任、学年教員、校内委員会と本人について情報を共有し、その支援状況を把握することが多かった。このことから、教諭は、校内関係者と児童生徒について情報交換をしやすい立場にあり、支援者の中心となって、本人を支援しており、養護教諭は、本人の支援について理解の得られる校内関係者と本人について情報を共有し、校内関係者の支援上の役割を把握しながら本人を支援していると推察される。

一方で、本人のカミングアウトへの考えや気持ちによっては、連携による支援が望まれない場合もある<sup>19)</sup>。しかし、本人の性別違和感の把握や、いじめや不登校といった本人の問題の解決、他生徒へカミングアウトをするためには、組織的な対応が望まれると推察される。校内関係者との連携による支援が、本人を多面的・総合的に理解でき、教職員間の共通理解により、より効果的な支援ができるとされているように<sup>35)</sup>、性別違和感のある児童生徒への支援について、校内組織体制の確立を図ることが必要不可欠であると考えられる。そのためには、当事者の学校教育への期待や改善点として、全ての教員や教育関係者が研修を受け、正しい知識を身につけること、相談しやすい環境づくり、教育内容に多様な性を取り上げることがあげているように<sup>28)</sup>、性別違和感に対する知識や理解を教職員間で共有し、校内組織体制を確立しつつ支援することが必要であると考えられる。

#### (4)-6 校外関係者・関係機関との連携によって本人を支援する

教諭では、主治医、校外カウンセラー、宿泊行事での旅行会社との連携であり、養護教諭では、主治医、校外カウンセラー、教育委員会、他校の養護教諭、後任の養護教諭との連携であった。教諭及び養護教諭を対象にした調査では、性別違和感のある児童生徒への支援について、教諭及び養護教諭の半数以上が、専門医の協力や、教育委員会の協力、医師の診断書が必要であると回答しているように<sup>20)</sup>、それらの校外関係者・関係機関との連携による支援が見られた。本研究において、学校は、主治医と面談し、管理職や担任、養護教諭、相談員といった校内関係者と主治医との間で本人について情報を共有し、カミングアウトを含めた本人への支援体制について助言を受けていた。主治医との連絡は、担任が中心となり、支援の進捗状況について報告していた。性同一性障害において、ホルモン療法の開始が18歳から15歳に引き下げられ<sup>8)</sup>、中学校から高等学校にかけての治療が可能となる。中塚<sup>27)</sup>が、教育的視点とともに、医療的視点からも経過観察し、場合によって支援をする必要性を述べているように、学校と専門医療機関との連携は重要であると推察される。

また、教諭は、宿泊行事の参加について、本人への配慮事項について旅行会社と共通理解を図っていた。養護教諭は、本人の状況を相談したり、カミングアウトの仕方について共に検討したりと校外カウンセラーとの連携を密にし、本人の取り巻く状況や今後の支援の仕方について教育委員

会と連携していた。また、個人的に研修会に参加し、講師である臨床心理士や他校の養護教諭から情報収集していた。さらに、転勤のため後任の養護教諭へ支援について引き継ぎを行っており、教諭と比べて、校外関係者・関係機関からの情報収集や連携による支援が多いことが確認された。児童生徒の現代的な健康課題の対応において、養護教諭のコーディネーターの役割を担う必要性が述べられており<sup>33)</sup>、養護教諭は、性別違和感のある児童生徒への支援において、校内関係者と校外関係者・関係機関とをつなぐ役割が期待されていると考えられる。

#### (5) 校種別にみる性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容

##### (5)-1 小学校における性別違和感のある児童への支援の内容

小学校において、本人の状況を把握することが最も多かった。次に、教諭は、学級活動で本人と関わることが多いことから、学校生活の状況に応じて本人を支援していることが多く、養護教諭は、本人について情報収集、情報提供することから、校内関係者と連携して本人を支援していることが多かったと推察される。校内関係者との連携において、教諭は、本人の思いを推測しながら、本人や他児童への指導といった学級単位での対応をするとともに、前担任や学年主任から情報収集していた。また、本人が問題行動を抱えている場合、管理職や養護教諭と情報を共有し、今後の支援の方向性を確認していた。養護教諭は、本人の問題行動の有無に関わらず、本人の対応について、担任と情報を共有し、管理職への報告を行っていた。また、養護教諭に、校外関係者との連携が見られ、管理職と共に教育委員会と共通理解を図ることや臨床心理士に本人の状況について情報収集することが認められた。

小学校における性別違和感のある児童への支援は、本人の状況を把握することを軸とした経過観察をするとともに、本人の思いを推測しながら、本人の仕草や言葉遣いが特別視されず、本人への揶揄を回避するよう他児童への指導など必要な対応を行うことが確認された。

##### (5)-2 中学校における性別違和感のある生徒への支援の内容

中学校において、本人の状況を把握することと校内関係者と連携して本人を支援することが多かった。中学校では、校内委員会などの校内組織による会議を定期的に行っているところもあり<sup>35)</sup>、教諭及び養護教諭ともに、校内関係者と本人について情報を共有する機会があったと推察される。本人の状況の把握において、教諭及び養護教諭は、本人の学校内外の状況を把握していた。校内関係者との連携において、教諭及び養護教諭ともに学年教員や校内委員会、全教員といった組織的な支援がみられ、本人の支援の状況に応じて、本人について共通理解が必要な組織により支援していると推察される。

また、教諭は、本人の問題行動の背景について、本人から話を聞き、本人の考えや気持ちを理解していた。養護教諭は、保健室の来室時や相談室で本人の辛さを理解していた。中学校において、性別違和感のある生徒は、学校生活を送る上での辛さをより実感しやすいと考えられる。さらに、本人の辛さや問題行動を回避するために、教諭は学級で同級生に対し、養護教諭は保健室で他生徒に対し、本人への揶揄や理解、個性を認めることについて指導していた。本人と同級生または他生徒との良好な関係を築くための対応が必要不可欠であると考えられる。

さらに、養護教諭は、学校生活での居場所の把握や保健室への来室理由を推測していた。また、本人の過ごしやすい空間を保障したり、本人の自己肯定感を高めるよう本人の活動を支持したりしていた。養護教諭は、本人が学級に居にくい状況を把握し、保健室や相談室といった学校内での本人の居場所を作り、本人を支持し対応していたことが推察される。

本研究において、支援当初の本人と保護者との関係は良好ではなく、保護者への対応において、

教諭は、本人への理解を得られるよう対応しており、養護教諭は、保護者の思いを把握し、本人の保健室での活動を伝えていた。中学生は、親に対する反抗期を迎えることや、親子のコミュニケーションが不足しがちであり<sup>36)</sup>、本人と保護者双方の思いに寄りそいながら本人と保護者との関係性を良い方向に向かうよう支援をしていくことが必要であると考えられる。校外関係者との連携は、本人の宿泊行事の参加について旅行会社との共通理解を図ることが認められた。性同一性障害において、小・中学校時代に集団研修や旅行を休むことに辛さを抱えており<sup>27)</sup>、修学旅行などの宿泊行事への配慮が必要になると考えられる。

中学校における性別違和感のある生徒への支援は、校内関係者との連携を密にし、本人の辛い気持ちを理解しながら、本人と同級生や他生徒との良好な関係を築くための指導や、保護者への対応が確認された。

#### (5)-3 高等学校における性別違和感のある生徒への支援の内容

高等学校において、教諭は、校内関係者と連携して本人を支援することと学校生活の状況に応じて本人を支援することが多く、養護教諭は、本人の状況を把握することと本人の考えや気持ちを理解することが多かった。本研究において、教諭は、本人からのカミングアウトを受け、本人の性別違和感に気づき、本人が自分の望む支援や今後の生き方について考えを固めており、教諭はそれに応じて支援していると推察される。また、養護教諭は、本人が保健室へ頻回に来室することや制服着用の乱れという生徒指導上の問題から、本人の支援の必要性を認識し、支援の過程でカミングアウトを受け止めたことや、教職員間の共通理解に困難さがあり、本人の状況を把握し、考えや気持ちを理解していると考えられる。本人の学校生活の状況に応じた支援において、教諭及び養護教諭ともに、他生徒への指導よりも、本人に対する対応が多かった。これは、他生徒が、本人の性別違和感を個性として認識したり、本人を理解したりする肯定的な認識や、本人が他生徒へカミングアウトできないことが背景にあると推察される。また、本人の望む学校生活を送ることにおいて、性別違和感のある児童生徒が悩む制服着用や頭髪についての校則があるなかで、本人の望む支援をどのくらい許容できるのかについては、今後の検討課題となると考えられる。

校内関係者との連携において、教諭は、本人から他教員へのカミングアウトの許可や希望があった場合、教諭が中心となり、学年教員、校内委員会、支援チーム、全教員といった本人への支援の状況に応じた組織と本人への支援について協議し、共通理解を図っていた。また、他生徒へのカミングアウトについては、主治医の助言のもと支援チームで全教員への研修会を企画していた。養護教諭は、本人のカミングアウトへの考えによって、連携する教員を検討し、管理職に報告し、担任やクラブ活動顧問、生徒指導教員、相談員といった本人との関わりの多い教職員との情報の共有が確認された。一方で、本人のカミングアウトへの葛藤から、校内関係者との連携への困難さが認められた。校外関係者との連携において、主治医、校外カウンセラーといった専門性のある人物との情報の共有や助言を受けることが見られた。性同一性障害においては、医師の診断書や意見書は学校での支援において大きな役割をもっており<sup>27)</sup>、教員が支援上の条件として医師の診断書があるとの回答が比較的高率であったことが述べられ<sup>18)</sup>、専門医療機関との連携は必要不可欠であると考えられる。しかしながら、カミングアウトしたことによって、すぐに専門医療機関と結びつくわけではない。性別違和感のある生徒の要望する対応は個別性が高く<sup>31)</sup>、本人の状況に応じて校内外関係者、関係機関と連携することが重要であると推察される。

高等学校における性別違和感のある生徒への支援は、本人の考えや気持ちが、その後の支援に影響していた。本人の考えや気持ちを理解し、本人のカミングアウトを支持して本人に対応し、



連携が必要な校内関係者を検討し、理解の得られる教職員との連携による支援であった。本人の望む性別で学校生活を過ごすことへの支援については、校内組織体制を整え、主治医との連携が重要であることが確認された。

#### (6) カミングアウトの有無にみる性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容

##### (6)-1 カミングアウトが有る性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容

教諭は、校内関係者と連携して本人を支援することと本人の状況を把握することが多く、養護教諭は、本人の状況を把握することと本人の考えや気持ちを理解することが多かった。また、他生徒よりも本人への対応が多くみられ、本人のカミングアウトを支持して本人に対応していた。

本人の状況や望む支援に応じて、連携の必要な校内関係者を選定し、支援の輪を広げ、本人について協議し、共通理解を図り、組織的に支援していた。組織的な支援について、教諭及び養護教諭以外のカミングアウトを望まない場合、教諭は、全教員に本人の性別違和感について情報を共有し、本人に他教員の支援が認識されないようにし、本人の支援について共通理解を図っていた。また、宿泊行事について、宿泊先を個室のある施設に変更するといった配慮が見られた。養護教諭は、他教員からの理解が得られる場合に、本人の学校生活において配慮が必要となる活動に関わる教員と管理職との連携で支援を行っていた。

また、性同一性障害において、管理職のリーダーシップのもと、本人への支援チームを編成し、主治医や校外カウンセラーといった専門機関と連携していた。本人がカミングアウトを希望する場合、性同一性障害に関する知識を校内で共有することがあげられており<sup>31)</sup>、支援チームは、性別違和感に関する研修会を行い、全教職員で共通理解を図り校内での支援体制を確立させていた。

さらに、保護者の理解のもと、主治医からの助言を受けて支援していた。学校は、性別違和感のある児童生徒の状況に応じて、専門的な立場である主治医や校外カウンセラーの助言を受けながら、支援体制を十分に整えて支援にあたることが必要であると考えられる。

本人からのカミングアウトの有る場合、本人の考えや気持ちを十分に理解し、本人のカミングアウトを支持し、校内外関係者との連携によって支援していた。

##### (6)-2 カミングアウトが無い性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容

教諭及び養護教諭の支援は、本人の状況を把握すること最も多かった。カミングアウトの無い場合は、本人の状況を把握することを軸に経過観察をする支援を重視していると推察される。

学校生活の状況に応じて本人を支援することにおいて、本人の思いを推測したり、本人の考えや気持ちを理解したりしながら、本人の仕草や言葉遣いを考慮して、本人に対応していた。また、他児童生徒に対し、本人への揶揄や理解、個性を認めることについて指導していた。校内関係者との連携においては、本人の状況に応じて、管理職や担任、養護教諭、学年教員といった情報収集や相談ができる一部の教員と本人について情報交換をし、支援の仕方について共通理解を図っていた。

本人からのカミングアウトの無い場合、本人の状況の把握及び本人の考えや気持ちの推測や理解を軸にして経過観察するとともに、その状況に応じて本人と他児童生徒へ対応し、連携の必要な一部の校内関係者、情報収集が必要な校外関係者との連携による支援が確認された。

### 3-4 まとめ

小学校、中学校、高等学校に勤務する教諭、養護教諭への面接調査から、性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容について以下のことが明らかとなった。

性別違和感のある児童生徒への学校における支援の内容は、本人の状況を把握する、本人の考えや気持ちを理解する、本人及び他児童生徒に対応する、本人の保護者へ対応する、校内外関係者・関係機関との連携によって本人を支援することが確認された。

教諭及び養護教諭は、性別に注視して本人の状況を把握し、本人の考えや気持ちを理解していた。その状況に応じて、性別違和感を考慮した支援や連携による支援といった支援の拡充の必要性を認識していた。性別違和感のある児童生徒の多くが、友人関係、制服の着用・服装、恋愛等で悩んでおり、不登校、いじめ、うつ状態、自殺行動等の状況が認められ、教諭及び養護教諭はそれぞれの役割に応じて、本人や他児童生徒に対応していた。保護者へは、保護者の本人の性別違和感に対する戸惑いなどの思いを考慮した上で、本人の支援への理解を促していた。また、校内関係者との連携による支援が多く、本人の状況や要望に応じて、連携者が選定され、支援が拡大していた。さらに、校外関係者・関係機関との連携による支援が見られ、本人が望む性別で学校生活を過ごす場合は、校内組織体制を整備し、主治医との連携のもとで支援していた。

校種別にみる支援は、小学校では本人の経過観察を重視し支援する、中学校では、校内関係者との連携を密にし、本人の状況を考慮した本人及び同級生や他生徒、保護者へ対応する、高等学校では、本人の考えや気持ちを理解し、それに応じて校内外関係者と連携し、本人へ対応することであった。

本人からのカミングアウトの有無にみる支援は、カミングアウトの有る場合において、本人の考えや気持ちを十分に理解し、本人のカミングアウトを支持し、理解の得られた校内外関係者・関係機関との連携によって支援する、カミングアウトの無い場合において、本人の状況の把握及び本人の考えや気持ちの推測、理解を軸にして経過観察するとともに、連携の必要な一部の校内関係者、情報収集が必要な教育委員会や校外カウンセラーとの連携によって支援することであった。

以上のことから、性別違和感のある児童生徒への学校における支援について、性別違和感に関する教職員間での共通した知識をもち、多様な性への理解を深め、校内組織体制を充実させ、そのような児童生徒が学校に相談しやすく、他児童生徒から理解の得られる環境づくりをすることが必要であることが示唆された。

## 4. 今後の課題

### 4-1 性別違和感のある児童生徒の把握

教諭及び養護教諭の約3割が性別違和感のある児童生徒と出会った経験があることが明らかとなった。支援した経験は約2割以下であった。一方で、多くの教諭及び養護教諭は、性別違和感のある児童生徒に出会った経験がなく、教諭及び養護教諭自身がそのような児童生徒の存在の認識の有無や、児童生徒自身の性別違和感の自覚の有無、教諭及び養護教諭へのカミングアウトの有無が関係していると考えられる。

また、教諭及び養護教諭は、当該児童生徒への支援を意識したのち、同性と異性のどちらの他児童生徒及びきょうだいとの関わりがあるのか、トイレの使用や着替えの状況、一人称の使い方、制服着用、保健体育の授業、健康診断の状況を把握しており、教諭及び養護教諭はそれぞれの立場で男女別になる行動の状況を把握していた。

つまり、学校において性別違和感のある児童生徒の発見及び悩みや問題行動の把握には、同性

及び異性との関わりや、男女別になる活動での本人の状況を把握することが欠かせない支援であると考えられる。

#### 4-2 性別違和感のある児童生徒の考えや気持ちの理解

教諭及び養護教諭は、性別違和感のある児童生徒が相談しやすい環境づくりの必要性を認識していた。本人が性別違和感を自覚しているか分からない場合に、本人の状況の把握から、本人の思いを推測して支援を進めていることが認められた。また、教諭は、本人からカミングアウトが有る場合、性別違和感を抱え学校生活を過ごすことや教諭以外へのカミングアウトへの考えや気持ちを理解していた。養護教諭は、カミングアウトの有無に関わらず、本人の考えや気持ちを理解していた。また、教諭及び養護教諭は、他児童生徒からの揶揄や教員の発言によって本人が傷つけないよう配慮して対応していた。一方で、教員による不適切な対応が認められた。本人の考えや気持ちを理解するには、直接的な関わりだけではなく、日常生活においても性別違和感について理解を示し、性別違和感のある児童生徒のみならず、多様な性を受容する言動をすることが必要であると考えられる。

つまり、本人の考えや気持ちを理解するには、教員自身が性別違和感に対する理解をもち、日常生活から発言や態度に留意することや、性別違和感のある児童生徒が考えや気持ちを相談できる空間とその機会の確保に努めることが必要であると考えられる。

#### 4-3 性別違和感のある児童生徒の抱える悩みや問題行動への対応

本研究において、性別違和感のある児童生徒の多くが悩みや問題を抱えていることが明らかとなった。具体的な内容は、友人関係、制服の着用・服装、恋愛、不登校、いじめ、うつ状態、自殺行動であった。これらの悩みや問題行動に対して、教諭及び養護教諭は、本人の状況に応じて本人に対応し、本人への揶揄や理解について他児童生徒へ指導していた。その際には、本人の異性のような仕草や言葉遣い、性別違和感を個性として捉え、他児童生徒に特別視されないよう配慮していた。そのような配慮が、個性として認めることや、本人へのいじめ被害等の回避につながり、当該児童生徒への対応だけではなく、他児童生徒を含めて、本人の悩みや問題行動への支援を行うことが必要であると考えられる。

しかしながら、悩みや問題行動を抱えていない事例も見られた。山田<sup>28)</sup>は、当事者が悩みを抱えていることは必ずしもそうではなく、セクシュアルマイノリティ内での多様性を述べているように、その多様性を考慮し、本人の状況を的確に把握する必要があると考えられる。

つまり、性別違和感のある児童生徒への学校における支援は、悩みや問題行動への積極的な支援をする一方で、あえて対応せずに、経過観察を重視する支援の仕方も必要となる。

#### 4-4 性別違和感のある児童生徒への保護者や校内外関係者・関係機関との連携による支援

本研究において、保護者、校内関係者、主治医等の校外関係者・関係機関との連携による支援が見られた。文部科学省の通知<sup>7)</sup>において、校内関係者が協力して、保護者の意向にも配慮しつつ、必要に応じて関係医療機関とも連携する対応ことが述べられているように、本研究においても認められた。主な連携者は、担任、保護者、管理職、スクールカウンセラー、他教員、養護教諭、校内委員会があげられ、特に校内関係者による支援が明らかとなった。連携者の選定は、本人の状況や要望に応じて、教諭及び養護教諭が必要と捉え、連携者が拡大していることが確認された。



本人に関する情報収集や相談は、本人と関わりの多い教諭と行い、学校生活上の配慮が必要となる支援では、管理職へ報告し、学年教員、委員会、全教職員と支援の輪を拡大していた。他生徒へのカミングアウトにおいて配慮が必要な場合は、校内組織体制を整備し支援していた。

保護者との連携において、教諭は、保護者の理解を得るよう対応し、養護教諭は、保護者の思いに寄りそう対応をしていた。また、本人は保護者から理解されない辛さを抱えていること認められた。本人の進路や今後の治療、学校における支援への共通理解を図るためには、児童生徒と保護者との良好な関係を作ることが必要であり、学校は、教員それぞれの立場から、保護者へ対応をすることが必要であると考えられる。

校外関係者・関係機関との連携が認められ、主治医との連携は、性同一性障害においてみられ、本人の治療を含めた状況について情報を共有し、カミングアウトの仕方や支援方針、保護者への対応について助言を得ていた。本研究では、主治医との連携によって本人が望む性別で学校生活を送ることができ、専門医療機関との連携による支援は重要であると考えられる。

連携による支援を行うためには、連携者間の共通理解が必要であり、教育関係者が性別違和感に関する正しい知識をもつことができるよう研修会に自ら参加するとともに、教育機関が意図的に研修会の機会を設けることが必要であると考えられる。

#### 4-5 本研究の限界と研究の課題

本研究は、X市、Y、Z県内の教諭及び養護教諭を対象としており、教諭及び養護教諭からの視点から捉えた性別違和感のある児童生徒への支援であり、対象数が少なく限られた地域であった。また、性同一性障害など、疑いも含め名簿上の性別と性別自認の一致しない児童生徒への支援が多かった。

今後、性別違和感のある児童生徒が自分の性を肯定的に捉え、望む性で生きていくための支援を明らかにするには、性同一性障害の他、同性愛や性分化疾患など多様な性を対象とした調査や、学校のみならず、医療や福祉という視点から当事者や保護者、相談員、専門医療機関、教育行政機関といった対象者を広げて調査する必要があると考える。

#### 謝辞

本調査を行うにあたり、その趣旨にご理解いただき、ご高配くださった学校長様、並びに大変お忙しいなか、快くご協力くださった教諭、養護教諭の皆様にご心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) セクシュアルマイノリティ教員ネットワーク編：セクシュアルマイノリティー同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性、81-85、131、206、明石書店、東京、2003
- 2) 加藤慶、渡辺大輔編：セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援 増補版～エンパワメントにつながるネットワークの構築に向けて～、13-224、開成出版株式会社、2012
- 3) 浅井春夫、セクシュアル・ライツ入門 子どもの性的人権と性教育のための20章、26、(株)十月舎、東京、2002
- 4) 風間孝、河口和也：同性愛と異性愛、77-144、岩波書店、東京、2010
- 5) 小宮明彦：多様な性をめぐる（性）教育に関する一考察 性教育担当教員への面接調査を中心に、論叢クィア、4、135-150、2011
- 6) 栄留里美：地方都市のセクシュアル・マイノリティの権利が条例化するための条件、大阪市立大学人

- 権問題研究、8、93-110、2008
- 7) 文部科学省：児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について（通知）、2010
  - 8) 南野知恵子：性同一性障害の医療と法—医療・看護・法律・教育・行政関係者が知っておきたい課題と対応—、36-38、90-95、メディカ出版、大阪、2013
  - 9) 中塚幹也、江見弥生：思春期の性同一性障害症例の社会的、精神的、身体的問題と医学的介入の可能性についての検討、母性衛生、45(2)、278-284、2004
  - 10) 日高康晴：ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛的役割葛藤と精神的健康に関する研究、思春期学、18(3)、264-272、2000
  - 11) 日高康晴、木村博和、市川誠一：厚生労働省エイズ対策研究推進事業 ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2、[http://www.j-msm.com/report/report02/report02\\_all.pdf](http://www.j-msm.com/report/report02/report02_all.pdf)、最終アクセス日2012年7月30日
  - 12) 石井香里：女性同性愛者が抱える生活上の問題に対する当事者の姿勢—同性パートナーと同居する女性のインタビュー調査から—、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、3(1)、65-76、2009
  - 13) 伊藤瑠里子、葛西真記子：セクシュアル・マイノリティの抱える「生きづらさ」とソーシャルサポートの在り方、鳴門教育大学学校教育研究紀要、26、95-103、2011
  - 14) 田原歩美：高校生を対象とした性教育ピア・カウンセリングの効果—性的マイノリティに対する態度変化のテキストマイニング—、マクロ・カウンセリング研究、8、26-39、2009
  - 15) 桐原奈津、坂西友秀：セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応、埼玉大学紀要 教育学部（教育科学I）、52、(1)、55-80、2003
  - 16) 和田実：同性愛に対する態度—調査年、性、ジェンダー・タイプとの関連—、人間研究、7、11-25、2009
  - 17) 田中将之：Transgenderの生徒に対する入試面接 性同一性障害が疑われる生徒への学校の対応、心理臨床学研究、23(4)、498-503、2005
  - 18) 菊池由加子、新井富士美、松田美和、清水恵子、中塚幹也：小・中学校の教員における性同一性障害に関する認識と対応—教員の性別との関連—、日本性科学会雑誌、28(1)、57-63、2010
  - 19) 畔田由梨恵、中下富子、岩井法子、大信田真弓：性別違和感を抱える中学生・高校生に対する養護教諭の支援方法の特徴、日本健康相談活動学会、8(1)、44-55、2013
  - 20) 岡崎倫子、菊池由加子、新井富士美、清水恵子、松田美和、田淵和宏、鎌田泰彦、中塚幹也：性別違和感のある子どもに関する文部科学省通知の認知度GID（性同一性障害）学会、4(1)、63-65、2011
  - 21) 杉山貴士：性的違和を抱える高校生の自己形成過程—学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から—、技術マネジメント研究、5、67-79、2006
  - 22) 麻生一枝：科学でわかる男と女になるしくみ、53、166-167、ソフトバンク クリエイティブ株式会社、2011
  - 23) Berelson, B. (稲葉三千男、金圭煥訳)：内容分析、6～59、みすず書房、東京、1957
  - 24) 文部科学省、厚生労働省：疫学研究に関する倫理指針、2008
  - 25) 文部科学省：学校基本調査、2012
  - 26) 日高康晴：社会調査から見た性的指向と健康問題、女性学評論、21、49-66、2007
  - 27) 中塚幹也：学校保健における性同一性障害者—学校と医療の連携、日本医事新報(4521)、60-64、2010
  - 28) 山田公二：データを読む「セクシュアル・マイノリティの子どもたちへの教育支援の在り方について」アンケート集計結果、セクシュアリティ、36、92-103、2008
  - 29) 中塚幹也、安達美和、佐々木愛子、野口聡一、平松祐司：性同一性障害の説明、ホルモン療法、手術療法を希望する年齢に関する調査、母性衛生、46(4)、543-549、2006

- 30) 宮澤仁、福富護：同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連、東京学芸大学紀要、総合教育科学系、59、211-221、2008
- 31) 中塚幹也：学校の中の「性別違和感」を持つ子ども—性同一性障害の生徒に向き合う—、2013
- 32) 石丸径一郎：性的マイノリティにおける受容体験と自尊心—カミングアウト効果に関する実験的検討—、コミュニティ心理学研究、9（1）、14-24、2005
- 33) 文部科学省：子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について、平成20年度中央教育審議会答申、2008
- 34) 荘島幸子：性別の変更を望む我が子からのカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し、発達心理学研究、21(1)、83-94、2010
- 35) 日本学校保健会：子どものメンタルヘルスの理解とその対応—心の健康づくりの推進に向けた組織体制づくりと連携—、56-61、東京、2007
- 36) 文部科学省：子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）、子どもの徳育に関する懇談会、2009

(2018年10月29日提出)

(2018年11月16日受理)



# Support in Schools for Students Struggling with their Sexual Orientation or Gender Identity

**AZETA, Yurie**

Yasugi Municipal Yamasa Elementary School

**NAKASHITA, Tomoko**

Faculty of education, Saitama University

## Abstract

In this study, licensed instructors and school nurses filled out questionnaires (Study A) or were interviewed (Study B) in order to shed light on the support offered in schools for students struggling with their sexual orientation or gender identity. In Study A, 328 licensed instructors and school nurses working in 164 public elementary schools, junior high schools, and high schools in an unnamed city were administered an anonymous, self-administered questionnaire in December 2012. Of the 101 respondents, 30.7% had encountered students struggling with their sexual orientation or gender identity and 17.8% respondents had offered their support. Many of the students the respondents had supported were junior high school students, and many were boys. These students were concerned about things such as their friendships, attire and school uniforms, and romance. The respondents cited situations of bullying, depression, skipping school, and suicidal behavior. In addition, many respondents expressed the desire to learn how to support students struggling with their sexual orientation and gender identity. In Study B, from January to March 2013, 8 licensed instructors and 10 school nurses working in public elementary schools, junior high schools, and high schools across two prefectures were interviewed using a semi-structured interview method. These participants had supported students struggling with their sexual orientation or gender identity. A qualitative, inductive content analysis was performed. The interviews resulted in 16 case examples. Study B found that licensed instructors support students in the following ways: 【I. Grasp the individual's circumstances】 【II. Cooperate with school officials to support the individual】 【III. Offer support based on the situation of the individual's school life】 【IV. Understand the individual's thoughts and feelings】 【V. Support the individual based on their parents' understanding】 【VI. Recognize the need to increase support for the individual】 【VII. Cooperate with officials outside the school to support the individual】. In addition, it was found that school nurses support students in the following ways: 【I. Grasp the individual's circumstances】 【II. Cooperate with school officials to support the individual】 【III. Understand the individual's thoughts and feelings】 【IV. Offer support based on the situation of the individual's school life】 【V. Cooperate with parents and officials outside the school to support the individual】 【VI. Recognize the need to increase support for the individual】. The results of these two studies suggest that schools must use faculty members' shared knowledge of the struggles related to gender identity and sexual orientation to deepen their understanding of diverse identities, improve the organizational structure within schools, make it easier for such students to confide in their schools, and create an environment in which such students, in particular, are understood and accepted by other students.

**Keywords:** gender identity, sexual orientation, sexual-minority, school, support